新女界

第四巻第貳號要目

▲失敗の教訓（社説）　安井哲子
▲結婚及離婚問題と基督教　姉崎博士
▲女子高等教育論　籾倉小羊
▲予が獨逸に於ける見聞　村上幸多
▲子女の教育と家政問題　某夫人
▲日記の一節　野口せい子
◉身に沁みた親のしつけ
　親の志を繼げ　海老名みや
　母の祈り　山室軍平
　忘られぬ母の苦心　鳩山一郎
▲永生の歌　高田畊安
▲信子の父様　紫嵐
▲嬌風會の今昔　海老名みや
▲隱れたる閨秀書家　SH子
▲今路加傳　聖山生
▲希望の生活（教壇）　海老名彈正

東京新人社發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

千代田香油

毛髪の悪臭は交際上の不覺紳士も奥さんも嬢さんも香りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價

七十錢

卅五錢

廿五錢

十七錢

スワン石鹼

純白で易水に浮き價安くて品の良き英國製スワン石鹼は全國の藥舖小間物店化粧品にあり

英國製

スワン石鹼

日本一手販賣

東京馬喰町四丁目

山岸三之助

電話浪花 三七九三

振替口座 二〇五〇〇

京染

悉皆商

松井宗七

京都市新町三條上ル

并ニ白生地販賣仕候

玉

京都染元

染見本發送

黒紋附

模様染

新小紋

色染

更紗染

取引簡易

玉德商店

京都市醒ヶ井佛光寺

新女界第四巻第二號目次（二月一日發行）

◉社説
失敗の教訓　安井哲子

◉教壇
希望の生活　海老名彈正

◉想苑
結婚及び離婚問題と基督教　姉崎博士
予が在獨中の見聞　村上幸多
女子高等教育論　松倉小羊

◉文苑
信子の父樣　紫嵐
日記の一節　野口せい子
永生の歌　高田畊安

◉雜俎
身にしみた親の躾け
△母の祈り　山室軍平
△親の志なつけ　海老名みや
△忘れられぬ母の苦心　鳩山法學士
隱れたる閨秀畫家　S T 子
矯風會の今昔　海老名みや
今路加傳　せいさん

◉家庭
いかにして家政を改むべき乎　某夫人

△新刊紹介△林町より

通俗教育 ● 人道鼓吹

人道講話

入會の手續

一、本會は教育道徳宗教に關する講話を直接又は通信に依つて開かんとする者を以て組織す。
一、本會は村上專精先生を會長とす。
一、本會は何人をも選ばず入會を許す。
一、本會は其目的を達せんがために毎月雜誌「人道講話」を發行す。
一、本會々員には毎月「人道講話」を無代配賦す。
一、本會々費一ヶ年金七十二錢、必ず前金にて入會申込むべきものとす。

二月一日第二拾五號發行（見本七錢）

○第二十五號要目

人道の要は救濟在にり　文學博士　村上　專精
一、佛教は救濟主義なり
二、醫術も救濟主義なり
三、古人の實例を擧げて佛教家幷に醫家に警告す

◎六十一年間の夢物語　村上先生談

◎先賢古德の面影　岩上　行坡

◎東洋高等女學校の光榮

○新年號

◎明治の模範的貞婦人　文學博士　村上　專精

此の新年號の講話は、世の紳士淑女諸君は申すに及ばず、修養に志ある士君子の必讀すべき所でありります。殊に其の中にても現下學校に通ひて勉强しつゝある男女學生諸君、及家庭にある妻たる人、夫たる人、嫁たる人、姑たる人、總て一讀してもらひたき小冊子であります。（定價十錢）

發行所　東京小石川區丸山町　振替東京二〇三二四　人道講話會

『かれこれと迷ふこと勿れ
完全無缺なる大學目藥あり

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●のぼせ目●かすみ目●血目●疲目其他眼病一切に驚くべき奇効あり●全國各地有名の藥店にあり

羽仁もと子主筆

婦人之友

二月號　一日發行　一冊　十八錢　郵税一錢五厘

半年分　前金郵税共　一圓八十錢
一年分　前金郵税共　二圓十錢

◎幸福論

神を無視する人、人を無視する人……羽仁もと子

◎美貌と運命

文學博士三宅雪嶺

▲美人は何故に薄命なるか▲美貌の要素▲美貌の勢力▲英國皇太后と女優サラベルナル▲絶世の美人とは如何なるものか▲ゼヨセフキンとナポレオン三世の皇后ユーゼニー▲美貌の濫用▲下田歌子と美貌

◎中流の生活問題

▲中等社會の教育は如何にすべきか
▲娘一人を嫁けるに何程の費用を要するか
▲如何にして衣服費を節減すべきか
▲十年前の物價と今日の物價比較表
▲最經濟的なる交際法

◎下婢の躾方(二)仲働と御飯焚きの雇入れ方　加藤常子

◎子供の頭をよくする育て方　羽仁もと子

◎死に臨んで我子に遺した若き母親の手紙

◎忠婢の誠心、主人の放蕩を感化した話

東京小石川雑司ヶ谷町　婦人之友社　電話番町三六九八番　振替東京一一六〇〇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第四卷第貳號

失敗の教訓

安井哲子

一月には春場所大相撲がありまして、好角家は勿論、未曾て相撲といふ者を觀た事のない吾々までも日々の新聞を待ち兼ねて今日は何方が勝つたか負けたかと心配致しましたから、況して力士自身の心中は如何でありましたらう、實に察するに餘りがあります。幸にして初に勝を得た人々は、喜びと望みとに充たされて、再び勝利を得んと意氣込むに引換へ不幸にして敗を取つた者は意氣消沈再び相撲ふ勇氣も失せた樣に見ゆるのも實に氣の毒であります。吾吾の生活も亦之れに似て居るやうに思はれます。得意の時には心が愉快で、仕事も能く出來ますが、失意の時には愚痴のみこぼれて何事も手に附かぬ樣になります。彼成績の惡い生徒が、意氣自ら衰へて友達にも快く交らず、恰も自分の存在を晦まさうとするやうな態度であつたのに、偶良い成績を得ると俄

に元氣附いて自信も出來、自進んで他人と競爭を試んとするやうになるのは、實に恐ろしい程の變化であります。

吾々の中に一生何等の失敗にも出逢はぬ者は殆ありますまい。其度數と程度とは人々に依つて一樣ではありませんけれども、「一回の失敗もない生活は何等の價もない」と或人の申されましたやうに、失敗は決して吾々の耻づべき事ではありません。唯同じ失敗を幾度も無意味に繰返へす事は最も耻とする處であります。人間の價値は失意失敗の時に於て却つて現はるゝ者で、吾々平凡の者は苦しい境遇に處して只悲觀落膽し終には自暴自棄に終るのでありますが非凡の方々は此處に一大發展の根據を見出し、新なる希望を以て「より良き」方向に進まんと努力せらるるのであります、「自分さへ失望せねば眞の失敗はない」と或人の云はれたのは實に眞理で、吾々は實際の困難と戰ふ前に先吾想像の困難と戰ひ、先之れに敗れて後眞の敗北を爲すのであります。病氣の如きも其通りで、俗に「氣から病む」といふのは即此處であります。曾てシャムのある女學校で、「コレラ」病に罹つた生徒がありましたところが、教師中の佛蘭西婦人が頻りに其感染を恐れて居ると、終に之れに罹つて倒れたといふ事がありました。或は又他人の輕蔑を恐れて、身分不相應の生活をなしたり、實力以上に自分の智識を現はさうとして苦心するやうなのは、皆自分の想像する相手に對して爲す事で、他人は却つて身分相應、實力相應に振舞ふ人を尊敬するのであります。實に恐るべきは吾想像する相手であります。

若吾々が高い目的に向つて熱心に進まうとして居ります時には、恰も高山にでも登る時のやうに途中の困難に屈せず、何時かは頂上に達し得るといふ希望に充たされて愉快に進み行くものであります、心がかゝる狀態に在ります時には、假令試驗に失敗しても「此次には尙一層勉勵して好果を得ねばならぬ」と奮起し、徒に他人の輕蔑を想像して悲觀致しませ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ん。事業に失敗しても此通りで、苦しい中に貴い經驗を得た事を喜び、新しい勇氣と希望とを以て、再起たんとするの覺悟をなす者であります。又修養上でも其通り、一度過つたならば潔く之れを改め、同時に正しい生活に入らんとするの希望を見出だすのであります、之れが卽艱難人を玉にするのでありますけれども、周圍の人々の觀察や批評のみを氣にして、非を飾らんとしたり、負け惜みをしたりする樣な彌縫的生活には決して希望の伴ふ者ではありません。希望は實に潔白なる心に宿る光であつて、常に永遠を照す者であります。吾々婦人が遺傳の上から又境遇上から何事にも着眼點が低く、些細な事を氣に懸けたり、價もない事に頭を惱ますのは實に無益な事であります。今少し積極的の生活に移らねば心は常に不平と不安に充さるゝでありませう。

　嘗て私の尊敬して居りました先生が、「私には多くの缺點がありますから、貴女は能く之れに注意せねばならぬ」と云はれた事がありましたが、此時ほど私は此先生に敬意を表した事は御座いませんでした。益進まんとする者には、初から缺點や失敗がある事は明で、之れを改め之れに鑑みて學習するといふ事が卽進歩であります。其故に自分に爲した失敗は自分と共に周圍の人々に認められるのは當然で、之れを潔く正す所に其人の價値があるのであります。

　要するに、吾々女子は感情が強くありますために自分自身なり又は自分の仕事なりを進歩發展させやうといふ點に眞の興味を有たず、自分現在のまゝに於て滿足を得やうとするのでありますから、何事も淺薄で、奥深い處もなければ、遙向ふに認むべき何物をも有たぬのであります。此に於て虚僞失望嫉妬等あらゆる惡德が伴生して來て常に心の平和を破る之れに反して初めから自分の不完全を意識し、或は學校に於て、或は家庭に於て、或は社會に於て眞面目に學習しつゝ終にある目的地に達せん事を望んで居ります時には、あらゆる失敗は盡く敎訓となり、且又新路を照らす光明となるのであります。

教壇

希望の生活

海老名彈正

是故に我儕信仰に由りて義とせられたれば、神と和ぐことを得たり、此は我が主イエスキリストによりてなり、亦われら彼により信仰によりて今居るところの恩に入ることを得、かつ神の榮を望みて欣喜をなす。たゞこれのみならず、患難にも欣喜をなせり、そは患難は、忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る。こは我儕に賜ふ所の聖靈によりて神の愛われらの心にそゝげば也。

（羅馬書第五章第一節—五節）

基督者の生活が、望の生活なることは、基督以來千九百年の間、代々の幾千億萬の信者が實驗して疑はざる所のものであつて、これ實に基督を信ずる事によりて賜はる新なる生命である、此望みは誠に高大にして、其内容も亦極めて豐富である。唯今讀みたる中にも其の一面が云ひ表はれてをる、それは即ち「神の榮を望みて欣喜をなす」の一句である。之れは彼の旭日が東の山の端を破つて出る雄々しい姿や、又は夕陽が西海に沈まんとする神々しい所を見て感歎をく能はざるの美觀を云つたのであらうか。天地萬有に神の榮を見とめて、神を讃美する事はないではないが、併し以上は確かに我等人類が地上より、神の榮光を仰ぎ見てその神々しき聖姿を望んだ憧憬の情緒を云ひ表したものである。此希望は只だ望みて欣ぶのみであるかと云ふに、決してそうでない、此の中には自分も神の榮の中に入られると云ふ希望がある。ソコをパウロは云てをるのである罪なく汚なく無限の力を以て宇宙萬有を支配し給ふ神の尊い御狀態を仰ぎ望む、その中に自分自らも入

ることが出來る。卽ち神の榮光を自ら實現し得られると云ふ希望があるのである。ア、如何に淸い尊い希望ではないか。

　人の此の世に於ける狀態は誠に慘めなものである我等は朝に夕に罪と戰つて神の前に失敗を繰返してをる。我等の智識は極めて淺薄であつて、神の前に何等の能力もない。我等の意志も亦た甚だ薄弱なものであつて、我願ふところの善は之をなさず、却つて願はざるところの惡をなすと云ふ次第である。然るに我等に斯る光榮ある希望を授けられたことは何と有難い事ではないか。これ實に恩愛限りなき父なる神の眞情である。我等は神の子たる事をぼんやりと自覺して居るけれど、その內容には實に我等のはかり知る能はざる程の尊いものがある。夫れは卽ち我々が神の中に入れると云ふ希望である。パウロはこれを見て欣喜をなすと云つたのであります。

　又パウロは我等は望みによりて救はれると云つてをる。彼は何もかもこの希望によりて耐へ忍んだのである。彼は此希望の偉大なるを自覺して「我患難にも欣喜をなす」と云つてをる、エライことであります。何故に患難にも喜ぶことが出來るか、これは天の父の完きが如く完くならん爲に、患難を寧ろ欣喜として感謝するのである。人心最深の要求は神の樣になりたいと云ふ所に存する。又我等はそう云ふ尊い御聲を我等の心耳に聞くのである。これ卽ち如何なる患難に逢ふても欣喜をなす所以である、所が此希望は段々つよくなり、高くなつて行くものであります。パウロは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ」云々と云つてをる。こうなると人生が眞に意味あるものとなつて來るのである。一歩一歩向上の一路をたどりつゝあるのである。之れ實に神の榮を實現して行く道程であります。

　次に彼は練達は希望を生じ云々と云つてをる。こゝに來ると、我等の實驗は益々深くなつて來るのでこゝに至つて愈よ神の榮光の中に入られると云ふことが、明確になつて來るのである。恰も彼の露國彼

得大帝がチャーレス王と戰つた時、初めは連戰連敗であつたけれども、毫も屈せずして「チャーレスは我に戰を敎ゆるもの也」と云つて、遂に最後の一戰に、チャーレス王をして再びたつ能はざるまでに擊破したと云ふところに似てをる。こゝに露西亞帝國は其の根底を堅めたのである、我等は如何なる失敗に遭ふとも、そこに一大目的を定めて堅忍不拔の精神を以て進む時に、忍耐は必ず練達を生じて遂に其望を全うすることが出來るのである、信仰生活に於ても亦た然り、我等が洗禮を受けた時は一種の新しい精神狀態には入る、今迄はどうしても出來なかつた事が出來る樣になり、尊い希望が鬱勃としてわいて來るのである。併ながら決して無難で行くものではない、或は誘惑が生じ、或は疑惑が出で、或は迫害が出て來るのである。基督者の生涯は決して無事平穩なものではないのであります。

然り基督者は一面は確かに患難の生涯である。我等は誘惑患難等と戰はねばならぬ。此間には失意敗北、眞に斷腸の思ひに泣くこともあらう。けれども信仰の人は其の間に處して百折撓まず、進み進んで行く中に、確かなるものを握り、希望を以て神の榮光を望み、向上することが出來るのである。パウロは此間の消息を語りて「われら四方より患難を受くれども窮せず、詮かたつくれども望みを失はず」云々と云つてをる。之れは實に尊い實驗であります。ところが此恥を來らせざる尊い生涯は如何にして之を確實に握り得るのであるか「こは我儕に賜ふところの聖靈によりて神の愛我等の心にそゝげば也」とパウロは云つてをる。彼はこゝにこの尊い生活の根據を見出したのである。神が夜も晝も我等を育くみ給ひ、神の恩愛が如何に我等の上にそゝがれてをるかと云ふことを自覺する時に、我等は患難何かあらん、失敗何かあらん、之れ皆我等をして父の全き如く完からしめんための神の試練である、愛鞭であると思ひ來れば、我等の勇氣は百倍するを感ぜざるを得ないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私の家に今年は菊を鉢植にして、澤山栽培いたしました。すると實に澤山の花が出來て、黄や白や赤や誠に立派である。然るに仔細に其花を見まするさ凡ての花が悉く太陽に向つてをつて、一輪も外の方を向ひて居るものがない、家の内から花を見たいと思つて、鉢をこちらに向けかへても、何時の間にか又元の通りになつて太陽を向いてをる、少しも家の方からは見られなかつた。之れは太陽から尊い光や結構な溫味が其花の上にそゝぎ來り、花の本性が之を受けんために太陽に向ふのであつて其作用が間斷なくつゞく所に花が美はしくなり、大きくなるのである。此花には希望がある、もし此花が上を向いて太陽より光と溫みを受けないならば、斯く立派に花を開くことは出來ないであらう。我等の心も亦この花と同じで神の榮をのぞんでをるのである。人間の貴なる尊い性格が、神に向つて慕ひあこがれ、神の靈が我等の上に太陽の光の如く、又其溫みの如くそゝぎかけられ、茲に我等の貴なる精神が立派なる發達をするのである。私共は世の中ばかり見てをる時には、實に失望落膽するともあり、又此人こそと思つてをる友人から捨てられたり。又あらぬ事より地位を失ふて屢々元氣が沮喪するともありますが神は永遠かわらざる尊い神々しい榮光を以て、我等に向ひ給ふのである。夫れに照されて我等の心は上に向つて進むことが出來る。

我等は始終神の榮を仰ぎ望まねばならぬ、我心が外に向ふ時は花がしぼむ樣に元氣がなくなつてしまふのである。けれども花が如何に人力により內の方にむけても、直ぐ太陽に向ふ樣に、我等も色々の誘惑が我を他の方向にねぢ向けて神を離れしめんとするときにも、我心の奥底には何物を以ても動すこと能はざる或物を有し我心は常に神に向つて向上發展せんことを心掛けねばならぬ。常に心を神にさゝげて、神の恩寵に沐浴して居る時には、如何なる事にあふとも斷じて失望することはない。そうしてそこに希望の生活の根底があるのであります。（文責記者）

想苑

結婚及び離婚問題と基督教

文學博士　姉崎正治

一

基督教がは入る迄の羅馬の帝政時代には、姦通及び離婚は世の常の事であつて、何人も之を怪まず其風俗は實に亂れてをつた。羅馬の諺に Pater semper incertus「父は不確である」と云ふ言がある。よく當時の社會の眞相を表はして居るものである。又或婦はコンソルの交代よりも、夫の代る數が多かつたなど丶云ふ言葉もある位で、兎に角基督教がは入らぬ迄の羅馬帝國は非常に腐敗してをつたのである。然るに基督教が傳はつてより、その習慣法律に著しき影響を與へ、殊に舊來の道德に對しては大なる變動を來した。先づ第一に其の感化を受けたものは結婚及び離婚の問題であつた。

先づ結婚のことからいふならば、基督教では結婚は神の前に男女が一體となる者であるから、私通野合其他不正の男女の結合は之を認ず、其の間に產れた兒には法律は之に相續權を與へなかつた。そうして結婚と云ふことは教會が之を司り教會が之を裁可するのであつた。併して帝政時代には凡てが非常に亂れて殊に近親の結婚が盛に行はれ、兄弟とまでは行なかつたが從兄妹叔姪は當然の事として居た。基督教はこの近親結婚に對して嚴格なる制限を加へ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

從兄妹叔姪は勿論、四等親五等親までも之れを禁じたのであつた。之れ即ち夫婦一體を理想とする基督敎が、一夫一婦を標準として、その關係を亂さぬために最も其の弊害のある、親族結婚を制限したものであつて、風紀の亂れたる羅馬をして其弊を矯め、これが遂にかの有名なる羅馬法となりて後世にまで傳はるに至りしは、實に基督敎の勢力の偉大なるを證するものである。唯だ、公民と奴隷との區別嚴格なりし羅馬帝國の事とて、人類を神の子と見、平等とする基督敎も、之は如何ともする能はざりしと見え、公民と奴隷との結婚はこれを認めず、又た奴隷同志の結婚も之れを認めなかつた。そして奴隷の產んだ兒は、之れを主人の財產と認めたのであつた。之は後には變化したが、初めの五六世紀の間は此のまゝであつた。

　離婚に就ては基督敎のは入らぬ以前にも其の條件は法律に規定してないではなかつたが、之れも基督敎の傳來以前と以後とは少からず變化してをる。其は入らない前即ちコンスタンチン帝の初めの時代には、妻が夫に向つて離婚を請求する場合は、夫が人殺しをした時、夫が出家をした時、夫が捕虜となつた時、夫が叛逆人となつた時、夫が墓荒し即ち墓を發掘して死人の着物や品物などを盜んだ時等であつたが、其後二百年即ちイスチニヤの法典には夫が、姦通した時、劣等の女即ち奴隷と通じた時、夫が妻に對し危害を加へた時等の諸項を加へて、夫婦間の關係を神聖ならしめんと努めてをる。之れは全く基督敎の影響であつた。

　然して又夫が妻に對する離婚請求の條件に於ても同樣である。先づ夫が妻に對する理由としては、初めから妻の姦通したる時、妻が巫女の仕事をなしたる時と規定してあつたが、基督敎が傳はつてから、段々とそれがふゑて、後には妄に他人の宴會に出でたる時、正當の理由なくして外泊したる時（當時羅馬では妻女の外泊する習慣があつた）、夫の承諾なくして劇場又は曲馬場に出入したる時等の條件がふゑた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

のである。これ實に基督敎の影響によりて互に守るべき德義を嚴格に定めたものであつて。之に背いた場合には相手方は離婚を請求することを得たのである。以て如何に基督敎が、この腐敗墮落せる風俗を廓清せんがために、努めたかがわかるのである。

二

飜つて現代社會を見るに、現代は何れの國家何れの社會を問はず道德、彝倫は荒みに荒んでをる。男女の問題は益々亂れ、結婚の神聖は日に／＼汚されてをる。何だか羅馬の時代に復るやうな思ひがする。近比佛蘭西獨逸其他にて創作された小說を見るに、近親間の戀愛を寫したものが非常に多い。從兄姉や叔姪どころではない、もつと進んで兄妹甚しきは親子の戀を描いたものさへあつた。これが事實に於てあるや否や、それは知らぬが、兎に角小說が人心の機微を寫し、時代の傾向を描くものとすれば、斯るものが時代人心の、何れの部分にか潜んでをると云はざるを得まい。

而して離婚の如きもそうである。殊に我國などは世界第一等の離婚國として知られてをる。我法律には夫れ／＼離婚の條件を規定してをるが、男子が女子の人格を認め、眞に正當の手續をふんで離婚してをるかと云ふに多くは理不盡に追ひ出すのである。

先頃或外國雜誌に各國の離婚率が出てをつたが、米國の如きも之れを數年前に比すれば、非常に其率を增して來た。之は歐洲諸國でもそうである。そうして其の裏面には私通や姦通の多いのは蔽ふべからざる所ろである。又近來歐洲、殊に佛蘭西及び墺太利邊では、舊敎の中に反對運動が起つて、舊敎をやめて新敎を起さうとして、仲々盛な運動をやつてをる。或人の如きは其原因の一としてこれは舊敎では如何なる場合にも離婚を許さないが、新敎の方では夫れが自由に出來るからであると云ふことを數へてをる。曾て墺太利の公使として我國に駐剳してをつたクーデンオーフ氏の如きも之を唱へ、墺國に於ける實情を調査して、それを一冊の書としてをる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此の問題は非常な大問題であつて、元より外に種々の大なる原因があるのであるが、兎に角これも見逃すべからざる一原因たるは何人も認むる所である。之を要するに現代の歐米では基督教の勢力の衰微と正比例をなして、道德が衰へ、道義心が麻痺しつゝあるのは事實である。

之れは右の問題と直接の關係はないが、佛國にては「二人の子供主義」と云ふものがある。それは卽ち夫婦と云ふものは二人の子供を擧ぐれば、夫婦の義務はそれで果されたものである。一の夫婦で二人づゝ生めば世界の人口は減少せぬとの主張の下に二人の子供を產めば後は避妊法を行ふ主義である。佛國にては現に之れが實行されてをる。私が獨逸に居つた時、或司法官が此の說を主張した、所ろが官吏たる身分を以て斯る說をなしたと云ふので職を免ぜられたのであつたが、十年後の今日は盛に其說が持て囃されてをると云つて、先頃も獨逸の友人から通信があつた。尤も之れは單純なる道德問題ではない此の背後には生活難てふ問題が橫はつてをる。何故に僅々十年の間に斯くまでに生活難が生じ來たが、それは租稅の重いためである。卽ち軍備擴張費のためである、獨逸などでは今日、收入の半ばを租稅として納めねばならぬやうになつた。我國にも早晩かかる問題は起つて來ると思ふ。予は今茲に此問題の是非を論ずるのではない。此の問題が道德上に及ぼす影響を考へて見たいのである。

斯る事柄が實際に行はるゝとすれば、夫婦關係と云ふものは勢ひ器械的のものとならざるを得ない。ソコに弊害がある。先頃或主義の人々が唱へた、夫婦と云ふものは別に結婚制度の下に結びつく必要はない。好いた同志が好いた間一所になつて嫌いになつた時は離れたらよい、子供が出來たら社會が夫れを預かつて育てるやうにするのである、と云ふ說なども、つまり夫婦關係を器械視する所から起つた謬說である。

此等の諸問題は一面社會問題であつて、同時に法

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

律問題にも觸れてをるのであるが、しかし其根本に遡れば道德問題であり、宗教問題である。故に之を解決せんには、基督教の教旨なる夫婦一體の眞理を唱へ、一夫一婦を人倫の大義とする夫婦神聖論を以て之に當らねばならぬ。夫婦の眞意義がわかれば釋然たる問題である。我國民の如きは、結婚の眞意義を解せず、從て離婚の不德たるを感せない。昨年婚を結び、今年は別れて途上の人の如しと云ふ有樣である。上にも述べたるが如くこれは決して單純なる問題ではないが、其の解決は宗教、特に基督教の力に俟つものが多い。切にクリスチャンの奮勵を望んでやまない次第である。（談話梗槪、文責記者にあり。聖）

女子の高等教育問題に就て

籾倉小羊

一

余の少年時代には、鄕里などでは男子が中學を卒へて更に高等教育を受けることは重大なる問題であつて、多數の人は高等の教育は畢竟するに子弟を生意氣にし、怠惰者を作ることであると考へ、高等教育は卽ち高等遊民を作るのであると結論したのである。然るに文明の進歩は爭はれぬもので今や斯の如き議論は一場の昔話となり、目に一丁字なき農夫も、子供には學問をさせねばならぬと勵む世の中となつたのは、國家のため慶賀すべき現象である。然して近來は我が國に於ても、女子の高等教育問題が非常に叫ばれることゝなり、大に世人の注意を惹いて來たのは自然の勢力とは云ひながら、誠に喜ぶべき事である。

元來社會の福祉にせよ個人の幸福にせよ凡て調和を得たる發達を待て實現し得べきものである。男子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

のみは非常に發達した敎育を受けながら、女子のみを依然として舊來の儘に現存せしめんとするのは、之を女子自身より見ては勿論、社會の側より見るも實に不幸なりと云はねばならぬ。然るに女子の高等敎育と云へば、兎角異論を唱へ、賢母良妻主義の名の下に隱れて、高等敎育に反對する者の少くないのは實に慨嘆の至りである。之等の論者は女子は男子のために造られしもの、男子の玩弄物と心得てをるやうである。併ながら婦人も一個の人である。今日開明の世に於て夫は外に出でて活動するに、その片腕たり、內助者たらねばならぬ妻が、夫の奴隷たり、玩弄物たるに止まるならば、如何にして其內助の功を完ふすべきか、到底不可能のことである、先頃ある法學士が一人の婦人と結婚するため、見合ひまでして略ぼ纏りかけて居る時、男の方から「女大學」を守る決心あるかとの質問を受けたので、夫れなり破談になつたと云ふことを聞きいたが、帝國最高學府を出た堂々たる學士が、今時の婦人に對し女大學を守るかなど、よくも質ねられたものである。これでは女子高等敎育の不必要論者のあるのも、無理もないことである。

私の見る所を以てすれば女子の高等敎育の不必要を唱ふる論者は深き理由と確信の上に立つて、自説を主張するのでなく、女は內にありて生きた人形として男子を慰籍すればよい喜ばすればよいと云ふ、習慣的な極めて淺薄な考へから、否寧ろ陋劣な精神から來てをると思ふ。成程斯る精神から見れば女子の高等敎育は全然反對して然るべきである。何となれば高等敎育は女子に卓邁なる見識を與へ、健全なる精神を與へ、自尊の信念を與へる。そして斯の如き精神を與へられたる女子は、有力なる內助者たらんとするは、その理想なるべしと雖も、然も斷じて男子の玩弄物となり、活ける人形たるを肯じないからである。

又或論者は女子が高等の敎育を受くれば、其學問を誇り、智識を誇り、女子本來の優美謙讓の精神を

失ひて、誇慢な男性的な畸型的人物を造り出す恐れがあると云ふ點から女子の高等教育に反對する。これは多くの人の中には或はそういふ人物も出るかも知れない。しかしそれは男子に於ても同樣である。由來社會の凡ての事がそうである。利益のある所には同時に多少の弊害も伴ふものである。敢て女子教育のみに限つた事ではない。米國の如きは女子高等教育の最も發達した處である。米國婦人と云へば多くのものは、所謂男を尻にしく畸型的な婦人と思つて居るけれども、少しく米國の事情に通ずるものは決して其然らざるを發見するであらうと思ふ。予は今議論をやめて、彼等が高等の教育を受け、卓拔せる智識を有しながら、家庭の主婦として如何に甲斐甲斐しく立働き、以て理想的の家庭を作りつゝあるかと云ふ、一二の例を話したいと思ふ。

二

私はカリホルニヤ大學に學んで居つた時、同大學

のエル教授の家に寄遇して居つたのである。教授の邸宅はバークレー市の北方の小高き丘上にありて、バークレー市を眼下に見下ろし、遙かに金門灣を望んだ、實に理想的の住居でありましたが、家は至つて質素で、その家族はと云へばエル教授と同夫人と當時一歲の孃エレナと、私と都合四人でありました。エル夫人はカリホルニヤ大學文科の出身でバチエラア、オブ、ヒロソフイの學位を有する人で、哲學を專攻した、一角の學者であつた。女子高等教育に反對の御方は、大學の出身にしてバチエラーの學位を有し、哲學までも專攻した婦人なれば一家の主婦としては定めて女王の如く、威張り散らして居ることと想像されるであらう、所が決してそうでない。其妻とし母としての技量は實に立派なもので、私は女子高等教育問題がこのエル夫人に依つて解決せられたかの如く感せざるを得なかつた。

　先づ夫人が家庭に於ける狀態を申しますなれば女婢もなき同夫人は一人夙く起きて、朝の仕度をなし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

教授の出勤を送りて後は、第一にエレナ孃に湯を使はせ、次に室内の掃除をなし、やがて正午になれば晝飯の準備に移り、午後は四時頃まで訪問の時間と定つてをつた。西洋間は日本風の室よりは萬事がこみ入つて居る。然るにエル夫人はそれの拭き掃除、何から何まで正午までにはキチンと仕舞つたのでした。そして、其仕事の間にも實に快活に、活潑に少しの不平不滿もなく、何時も微笑しつゝ、些細の事も粗忽にせられなかつた。

高等教育を受けた婦人は、女の大事な料理法を知らぬとか、理屈を並べるばかりで主婦の生命とも云ふべき子女の教育法の心得がないとか批難する人もあるが、同夫人の如きはそれは全く見當違ひで料理の如きは實に巧妙なもので、毎日〳〵夫の趣味嗜好に應じて、新しい品を撰擇し調理せられた腕前の如きは實に偉いものであつた。之を頭のない婦人が唯た習慣的に、三百六十五日殆んど同じ調理をして居るのと比較して見れば實に雲泥の相違である。次に感服したのはエル夫人の子供の養育法である。同夫人がエレナ孃の上に拂つた注意は實に感心なもので一例をあぐれば、彼は室内に輕便な秤器を備へて置て、毎週エレナの體量をはかり、そうして其結果によりて幼兒の食物を加減するのであつた。殊に夫人は僅か一歲なる嬰兒の精神教育の上に大なる注意を拂つてをつた。それは如何なる方法を用ゐたかと云ふに彼女をソファの上に寐ませて常に高雅なる音樂を奏して彼女に聞かせるのであつた。

又その教授に對しての夫人の心盡しは、至れり盡せりで、留主中書齋の大體の整理は勿論、教授の趣味に應ふた讀み物を整へて置たり、或は參考書の整理をしたり、往復文書に豫め目を通したり、歸宅すれば之を迎へて、文藝上の興味ある話を以て其疲勞を慰めたり、凡て教授の力となり助け手となることを努むる點に於て、とても普通の婦人の及ぶ所ろではなかつた。

余は十余年の間米國にありて幾多の家庭に出入し

有ゆる方面の婦人に接したが、高等教育をうけた婦人は皆エル夫人の如きものであつた。米國の有名なる大學は何れも女子の入學を許してをるのみならずスミスの如き、バサーの如き、ウエレズレーの如き高等なる女子大學があつて、女子の高等教育は當然の事となつてをる。余は我國の女子教育が一日も早く斯くの如き狀態にまで進まんことを希望してやまない次第である。〔文責記者〕

予が在獨中の見聞の二三

村上幸多

○

私は獨逸に被れたわけではないが、冷靜な眼を以て見ても、彼國に學ぶべき事の多いのは驚いた次第で、何を見ても感服せぬものはなかつたのである。茲には主に婦人の方面に就て、見聞の二三を語りて見たい。

獨逸の婦人ほど常識の發達した婦人は少くない、彼等は常識のないと云はれることは、何よりも恥辱としてをるのである、又彼等は實に勤勉であつて、寸時も時間を空過しない。何かせねばやまぬ、之れは獨逸の男子がそうであつて、實に努力主義な積極主義な人種であるから、女子も同樣に斯く勤勉なのである、そうして又彼等は實に快活で活潑で、愛想よく人を遇する。之れ彼等が社交に長じ、常識に富む原因でもあり、又この結果は一層常識的に快活になるのである。

○

獨逸婦人の特長は佛蘭西婦人と違ひ、質素にして純朴なる所にある。此點は大に日本婦人の彼等に習はねばならぬ所である。例令ば彼等は衣服は美しい

と云ふよりも、耐久と云ふことを本位としてをる、卽ち洗濯がきくものを撰ぶのである。彼等は華美な新調の衣服を着るものに對しては注意を拂はぬが、見事に洗濯して、折目正しくコテをあてた、すがすがしい服裝の人に對しては一種の敬意を以て之を見るのである。以て獨逸婦人の心掛が知らるゝと思ふ。彼等は實に水際たつた服裝よりもこの折目正しき洗濯衣を賞するのである。されば絹布などよりも綿布類を用ゆる。そして彼等は一週の中の或日を定めて洗濯日とし、其日には朝より洗濯物をなして、干すのである。其方法も完全なもので消毒をかねた洗濯藥を入れて煮るのである。そうして其家の裏庭には細引を縱横に張りてそれに干すのであるが、其品數の多き驚くばかりである。之れは今日の我國の如く華美の風盛にして、身分の高下に拘らず美衣美裝をなし、質素純朴の風すたらんとする社會に對しては是非とも鼓吹すべき事であると思ふ。

更に記すべき一事は獨逸婦人の衞生思想の發達せることである。洗濯を盛にすることも一つは此の衞生思想から來てをるのである。彼等は洗濯を多くしない人は、不衞生な人とし、日本の學生などが如何にハイカラに着飾つてをつても、あの方は洗濯物が少いから不潔ですと、下宿屋の女までが批評するのである。洗濯物の多少によりて衞生不衞生を定むるのは實に當を得た標準と思ふ。

○

又食物に對する注意も至れり盡せりである。彼等は食物の分析率位はチャント心得てをる、例令ば人は毎日澱粉質を何程、蛋白質を何程、何を何程位はとらねばならぬ。夫れには何と何を何程位は是非食はねばならぬと云ふ風に萬事が學術的である。私が友人や教授の家庭に招かれた時、食卓の上で主婦にか聞るゝとは卓上の献立を指して「此位の物を食べて居つたら營養に不足はしませんか」と云ふとであつた。我國などにては此場合に何と云ふであらうか。多くは調理の巧拙、食物の嗜好位の話であらう

と思ふ。彼等は食物と云へば衛生と云ふことを本位としてをる。私の知つてをる家庭で或時、主婦と娘とが食時の時盛に議論をやつてをつた事があつた。何事かと聞いて見れば、母は馬齢薯は獨逸人の主食物であるから、一定の分量を食べねばならぬと云ひ娘は副食物であるから定量をとる必要はないと云ふ議論であつた。之等は極めて手近き例であるが之を見ても如何に獨逸婦人が衛生を重んし、健全なる身體を作り以て小は一身一家のため、大は國家のために、直接間接に盡しつゝあるかを知ることが出來る。

○

又彼等が趣味の高尚にして、美術思想に富むことも特質の一として數へねばならぬ。彼等の家庭に入つて見れば、其室の飾りつけから、何から何まで此の趣味と云ふことを忘れず、物と物との調和に注意し、額をかけるにも、器物をおくにも、凡て彼等の美術思想から割り出してをるのである。故に其家庭に入れば何人にも其の主婦の平常が偲ばるゝ。又彼等の流行物に對する態度が、實に敬服に値する。獨逸とても其折々に新奇の品が流行するのは同じであるが、しかし、それに對する獨逸人の態度は、他の國人と其の趣きを異にする。御承知の通り流行物に對する日本人などの態度は、たとへば、襟卷がはやると云へば誰れも彼も之を求めて上品な奥樣が藝者のやうなものを用ひたり。年とつた人が若々しい物を用ひたり、顏色が黒からうが赤からうが其流行品との調和とか配合とか云ふとは一向かまいなしで、仲には沐猴に冠した樣な滑稽を演ずることであるのである。然るに彼等は美術思想があり、趣味と云ふことを重んずるから、流行と云ふことよりも、此品は自分と調和があるか如何かと云ふことを凡ての方面から考へ、若し不可なればどんな高尚に見ゆるものでも之を用ゐぬ。彼等は流行品を制してをるが、日本人など流行品に制せられてをる。此趣味の生活と云ふことは日本婦人などには尤も缺けた所のものであらうと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

之れは獨逸に限つたことではないが、公德心の發達せることも大に私の心を動かしました。獨逸では公園などは元より、一般の道路に於ても其の兩側には林檎の樹を、奇麗に列を正して植えてをる。季節になつて、林檎の果が累々と實つた時の美はしさと云つたら、實に何物にも例へられぬ風情である。其樹下には兒童が嬉々として戯れてをるが、決してそれを取らない。落ちて居つても拾はないのである。又或時私は幼稚園を見た事があるが、其庭園には草花が色とり〳〵に咲きみだれてをつたが、其花園には間垣もなにもしてないのに、幼兒等は其まわりを遊びあるき、奇麗な花だきれいな花だと賞讚するのみで、決して之に手をふれないのである。

此公德心は自然〳〵に養はれたものであらうが其尤も大なる原因は幼少の時からの家庭の敎育が與つて力あることと思ふ。我國位公德心の缺乏した國はない。我等は此點に於ても大に彼等に傚はねばならぬと思ふ。

永生の歌

在伯林　高田畊安

生ある者はこと〳〵く　いきなんとこそ勵むなれ
命長きを求むるは　なべての人の心なり。
光榮えて生きんとは　更に進みし志
永久ひかる生命こそ　吾等の望む所なれ。

數かぎりなき佳物は　吾等なかこみ養へど
最もすぐれし恩賜は　とはにひからん生命のみ。
如何にして得ん此の生命　實に得がたきは此生命
光ろ生命のとこしへに　到らんことの望ましき。

こゝろおもひは悉く　汝の神をいつくしめ
巳が如くに其友を　いつくしめとの聖命
これや永久榮ゆべき　人の守らん道ならめ
又聖神とともならば　恐れ悲しむ事もなし。

古今將來いきまして　妙なる聖業なし給ふ
此父神に忠ならば　永久ひかり榮ゆなん。
自光りまた人を　光らしむるぞ聖旨なる
人をもいかし自も　永劫いくるの道行かめ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

身にしみた親のしつけ
（諸名家幼時の懐舊談）

親の志をつげ

海老名　みや

▲忘れられぬ一言

私は六歳の時に父に別れましたから、父に對する記憶は、唯だ秘藏娘として、膝に抱かれたり、脊負はれて庭を歩いたりした極めて稚なきことのみで、それ以上何も敎訓的な事などを想ひ起すことはありませんが、母は私の三十歳以上まで長命でゐましたので、幼時の記憶は、夫れから夫れと糸を繰るやうでありまして身に泌みた敎訓も隨分澤山あります。

其中にも私の幼き頭腦に深い〳〵印象を與へたものは「お父樣の志をつがねばなりませぬ」と云ふことでありました。この親の「志」を繼げと云ふ一言は私の最も幼い記憶で、何んでも父が亡くなつた當座から云はれたことの樣に覺えて居ますが、何かの敎訓の後には必ず親の志を繼がねばならぬぞよ、と申されました。私は「志」と云ふことは如何意味合があるか、何云ふ譯柄であるか、そんな事は、母も申しませず、私も質ねやうとも思ひませんでしたが、唯だ「志を繼ぐ」と云ふことは非常に尊いことのやうに思はれて、私にとりては一種の權威ある敎訓で、聞くたびに深い印象を受けたのでありました。此一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

言は私の成長の後も常に私の精神を支配しまして、母の此一言が、普通世間の立身出世をせよと云ふ樣な、所謂成功と云ふ意味と違ふことを感じまして、常に私を勵ますインスピレーションでありました。これは多分母が志士なる父の感化によりて受けた氣象であらうと思ひますが、私は所謂立身出世して、この世に榮耀榮華を極めるが人の最高目的でないと云ふ丈けは、身にしみ〴〵と敎へられました事を感謝して居ます。どちらかと云へば私の母は實行の人でありまして、何事でも口より先きに行ひを以て私を敎訓したのでありました。

▲身を以て華美を戒む

前申しまする通り、私は兄が一人ありますばかりで、一人娘でありましたから、皆からチヤホヤ可愛がられ、何事につけてもみやさん〴〵と持て囃されて育ちました。例令ば呉服屋なぞでも之れはお孃樣のに恰度およろしい柄だと申して品物を置いて參りますと、祖母なぞもあれ位は買つてやつてよからうと申しましても、一々それに反對して拒絶するのは母でありました。母は諸事まことに約かにして、特に衣服の如きは一枚として無疵のものはなく、どんなよい着物にも、どこかに繕がありました。唯だ母は實に趣味もあり、裁縫の技にもたけた人でありましたから、それが巧妙に出來てをつて、一見してはわかりませんでした。

或時私が「オヤ〳〵お母さんの着物にはこんな善いのにも繕がある」と申しますと、母は「お母さんの死んだ後で、簞笥を見たら恐らく一枚も繕のないものはないだらうよ」と云つた事がありました、これは眞實でありました。こんな風であつたから母は着物を調へる時にも、新しい反物を表裏とも裁ち下ろして、襟あけをするといふ事なぞはなく、表が新しければ、裏は古物を取り合せるとか、裏が新しいのなれば古いものを見計らつて、手を入れて表にするとかいふ風にして、裏表とも新しい物を襟あけをすることは、勿體ないと云つて、決してこれをせら

れませんでした。母のこの教訓は私の心にはよくよくは入つたものと見へまして、私は今日でも新しいものを裁ち下ろして着ると云ふことはどうも勿體ないやうで、どうしても致されません。寧ろ古いものを手入れをして、廢物利用の様なことが面白いのであります。此趣味は全く母から得たものだと思ひます。又娘ざかりの時代にも、あれが欲しいとか、こんな物が着たいとか、着物のおねだりをしたことはない様に思ひます。

▲私は雑巾

私の生家は實に復雜な家庭でありました、殊に母が參りました時などは父の兄の未亡人がをる、其の子供が三人も居る、又母よりも四五年も前から勤めて、臺所一切を切り廻してをつた召使も居ると云ふやうな次第でありましたから、此間に處する母の骨折と云つたら大抵ではありませんでした。ところが私が十五六になりまするまでは母は唯の一言も家の紛糾した内情に就て、愚痴めいた事を云はれたことなく、私は此極めて混雜がつた中にありながら、此世に我家より平和な家庭はないと

自信し、春の野にあるやうな心地で、成長いたしました。其子が分別のつくまで、唯一言もそれを聞かせなかつたことを思ひまする時に、我母ながら實に偉いと思はざるを得ません。十七歳の頃に母は私に「私は此家の雑巾である」と申されました。家の中には雑巾と云ふものがあつて不淨を拭ひ淸める、私はその雑巾で、皆の間にありて、此役を勤めて生涯をおくるのであると申されました。私は此言葉を聞きました時に、初めて母がこの複雑なこみ入つた家庭を圓滿に治めて來た事を思ひ當りまして、その隠れたる所ろに如何に涙があつたか、獻身犧牲があつたかを思ひまして、實に母の德の高きに、心から尊敬の念を起さゝるを得ませんでした。母は實に忍耐づよい人で、眞に己を虚しくして人の爲に盡すの人又人に依頼した事は、徹頭徹尾その人を信頼して、自ら全く一指も染めぬといふ質の人でありました。例令ば勝手向の事は皆その老婢に任せて居りましたが、母は實に料理の如きは深く心得てをつた人でありましたけれど、一言も口を出したことがなく、自分は左ながら何も知らない者の様にして、人の手際を賞めるのでした。この己を虚しくして家族のために盡す精神、又人に委任した事は全く其人を信頼することの如きは、家を齊むる者の心得べきことゝ深く心に銘じし居ります。

▲布海苔一枚

母はまことに親切な人でありまして、私共にも常に人に親切を盡すべきを懇々と說いてくれました。そうして之を口にするのみならず實際に行ひて摸範を示されました。然して人に親切をする時は、あゝすればよかつた、こうすればよかつたと、後で心殘りのない様に十二分にしてやるものであると常に申されました。或時ながく宅に預つてをつた娘が、遠方に嫁く事となりましたので、母は何から何まで世話をして身仕度なども整へて立たせたのであつたが、いざ出立と云ふ時に母が荷物の中に布海苔を二枚程紙に包んで入れますから、私はそれは何故でありま

すかと尋ねますと、母はあの娘に髪を洗ふてやることが出來なかつたから、向へ着いてからスグ洗ふ樣に、こうしておくのです。あゝこれで心殘りが一つもないと、ホッと一息ついた事がありました。之れは極めて少き例でありますが、要するに凡てがこの通りで、人の爲めに盡す時は何一つ心に殘らぬ迄にすると云ふのが、母の常に云ひ、且つ行つた敎訓でありました。

▲愛の鞭

私が十三歳の夏でありました。或日曾て父の門下生であつた人達が數名參られましたので、御飯など上げたのであつたが、其人達が是非私に琴を聞かせて下さいと所望し、母も一曲お彈きなさいと頻にすすめましたが、どうしたものか、私は彈かぬ〳〵と意地張ましてとう〳〵拗ね通したのでありました。お客が歸りますと、母は甚だ不興の體でありましたが、私は別に氣にも留めずに居りました。するとそこに一疋の奇麗な蝶が室の中に飛んで參りまして、ランプの邊をとび廻つて居りますのを、母が團扇で打ち殺さうといたしました。私はどう云ふわけか、生來蟲や蝶など殺すことが嫌いで、どんな蟲でも逃がしてやつたのですが、此時も「お母さん可愛想じやありませんか、よして頂戴、殺すことよして頂戴」と團扇を遮りました。所が母が申しまするには、お前はそれ程此蟲に對してすら可愛想だといふ情があるのに、なぜ人に對して思ひやりがないのです。今夜の樣にお客樣の所望に背き、母の命令もきかず、强情をはつたと云ふのは、全く思ひやりがないからである。蟲を愛して、人を愛せぬやうな愛情は無益な愛情である。お前は誠に不心得な兒であると云つて、夜中そぼふる雨の中に、庭に立たされた事がありました。

私は泣く〳〵自分の不心得を詫び、やつと許されて家に入つたのでありましたが、此時初めて自分の强情なりしを悔い、人と同情同感になるとの如何に尊いことであるかと云ふことを深く覺りました。こ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れが私が母から叱られた最後であつたと思ひます。
　母は後ち遂に私共と同じ信仰に入つたので、母の高潔にして純良なる精神は基督の感化によりて益々高められ潔められ、實に立派なものを發揮いたしましたが、私は今日母を偲びまする時に、その混亂せる家庭の中に、父は東西に奔走して殆んど留守勝ちなる家を預りながら、何から何まで、一として人に指さゝるゝ事なきまでにやつて行かれた事や、その何人に對しても實に公平にして愛心ふかく、終に周圍の尊敬と信任とを一身にあつめた事や、家を齊ふるに細かにして、何事にも約かに、人をして知らず知らずの間に華を去り實に就かしめた事や。思ひましても唯だ〳〵及ばぬを感ずるのみであります。

（文責記者にあり。聖）

母の祈禱

山室軍平

▲私の故郷

私の故郷は備中國高梁川の上流、二十里近き山村でありまして、寧ろ山陰道に近き所であります。家は代々農を業としてゐましたが、別に所有の土地があるではなし、極めて貧しい水呑百姓であつたやうです。遠い昔の事などは元より分りませんが、私の曾祖父は天保の饑饉に、餘り人のために奔走しましたので、遂に其ため病を得て死んだ人だそうで、當時の人が山室のお爺さんは饑饉に祟られたと云つたとか云ふ話を、母から聞いた事がありました。
　父は何の事はない、お人好しで、正直律義より外に別に之れと云ふ取り柄のない人でありました。私は兄弟四人で、總領の兄は早世いたし、今はつぎの兄と姉と二人であります。兄は峯三郎と申しますが此人は私などと違ひまして、仲々健忍不拔の精神に

富んだ一種の人物であります。學問と云へば尋常小學しか卒業しないのに、農作の閑をぬすんで獨學いたし、字引相手に十八史略を百八十囘を精讀したと云ふ精力家で、其後小學校の雇敎師となり、夫れからそれと檢定試驗に合格して、今日では遂に村の小學校長をいたし、仲々人望もある樣で御座います。

私は母が四十三四の年に生れました末子でありましたので、隨分兩親に可愛がられてゐましたが、十歳の時に隣村なる杉本と云ふ親戚の處に養子にやられたのであります。

▲東京に出奔

此の家は質屋でありまして、私は小學校に通ふ傍ら、家業を助けると云ふわけでありましたが、學校の歸りに質物の受流の催促をして廻る事などが實に嫌いで、否嫌いと云ふよりも實は辛いので、幼な心にも、色々と事情を聞いては貰ひ泣きをして歸る事が幾度となくありました。こんな風であつたから自然此家がいやで〳〵、多少物心のついた頃には迚も自分は將來此家を繼ぐ事は出來ないと見切りをつけました。そして十五歳となりました春、愈々此の家を逃げ出だす決心をいたし、誰れにも無斷で東京に飛び出したのでありましたが、新橋についた時は、金が十錢しかなかつた事を記憶して居ります。夫れより色々紹介を求めて築地活版所の職工となり、一年ばかり薄給に甘んじて働いて居りましたが、十六歳の時、ふとした事から基督敎を聞くことゝなり、遂に其年の暮には洗禮をうけたのであります。其後神の御導と友の助けにより京都同志社に入學し、勉強いたしましたが、此頃から學校の休みには郷里に歸ることも出來たのであります。

▲母の神信心

家は依然たる慘めな狀態でありまして、兄は小學校に奉職しながら、家に歸れば三坪か四坪の土地に桐の木を植え、これが何年とかたてば何程になるから、一年に五錢づゝ大きくなる勘定だなどと申して居りました。此時分兄が一斗の米で六ヶ月暮したと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

申しましたが、實は人の前に出る時の辨當だけ米の飯で、外の時は粟や稗などばかり食べてをつたそうであります。こんな生計でありましたから母は、私が夏休みに歸りまして更に學校に歸る時には、何時も二十錢か二十五錢の餞別をくれました。これは多分母の臍繰の全部であつたらうと思ひます。私は先にも申した通り末子であつて、非常に可愛がられ居りましたが、月に五厘か一錢の金も始末して、私の爲に貯蓄したかと思へば、母の情けに對し實に感謝に溢れざるを得ませんでした。

然し私の深き感謝は夫れではありません。私の母に對する不斷の感謝は、母が私のために卵斷をして神樣に祈つた事であります。母の信心してをつた神樣は天神樣であつたか八幡樣であつたか、私は委しくは存じませんが、母は私を產んでから、どうか此兒が一人前に成人いたし、何か人樣の爲め御用に立つ人間となる事が出來るやうにと、神樣に誓願をかけ、其決心を表はすために一番大事な食物である所ろの、鷄卵を斷つ事を誓つたそうであります。私の生國は海から二十里も隔つた山國で、高梁町から十五里もあつて、途中は山あり谷ありと云ふ極めて不便な土地でありますから、魚などは藥にしたくつてもありまません。そして又肉類の如きも今日と雖も仲仲手に入りません。滋養物と云へばまづ卵子位なものです。夫れを母は私のために斷つたのです。

私が此事を聞きましたのは基督信者となつてからでありましたので、私は痛く母の精神に感激いたし何とかして母の希望にそひたい、母の希望む所の人物になりたいと心密かに決すると同時に、母に眞の神を紹介して此卵斷をやめさせたいと思ひました。で私が、お母さん、あなたの精神はよく分りました眞の神樣は必度あなたの精神をスッカリおわかりになつて居らつしやいますから、別に卵子斷をせずともよろしう御座います。どうぞ卵子なり何なり召し上つて、丈夫になつて一日でも長命して下さいと、再三再四、申しましたが、母は一向耳にも入れず、

傳はずにをいて下さい、理屈はそうでせうが、私の心がすみませんからと云つて、とう／＼前後三十餘年の間、これを繼續して一日もかわる事がありませんでした。私の母は自分の村から五里と外へ出た事はないと云ふ何も辨へぬ田舍媼でありましたが、私は思ふに、母は祈るべき眞の神樣を知らなかつたにもせよ、母の切なる祈願は、確かに天の父の許に達した事と信じます。私は母が、私と同じ信仰に入らなかつた事を遺憾に思ひますけれど、眞に心を直くして、神に仕へ己の如く隣を愛し、神の前に恥ぢざる生涯を送つたものは、其祈りの對照は違つてゐても、必ず神にきかれる事と信じます。此意味に於て母の祈禱も母自身には眞の神樣を知らなかつたけれども、神樣はチヤンと夫れを見そなはして、祈を聞き上げ給ひし事と信じてうたがひません。

▲使命の自覺

其後私は同志社を卒業しましてから、色々と自分のとるべき途を見出し兼ねて苦しみましたが、然し大體の目的は確然ときまつて居りました。夫れは如何にして平民に神樣の道を傳へ、その靈魂を救ふべきかと云ふことであります。卽ち母が、「どうか此兒が無恙成人して、世のため、人のため善事をする樣に」との切なる祈禱の精神は、私の精神に何時とはなしに刻みこまれて、造次も顚沛も忘れられぬ所のものとなり、其ため神樣は私を撰んで信者にして下さつたのであるから、私は此の福音を傳ふることが母の祈禱に應へ、神の御聖旨にかのふ、最善の方法であると堅く決心したのであります。其とるべき途を見出しかねて苦しんだと云ふのも、此目的に達する手段方法に苦しんだので、目的そのものに就てゝはありません。

そこで私は平民傳道をするには床屋をやつて、髮を刈りながら、神樣の道を說き、待客のためには俱樂部やうの別室を設けて、そこには基督教の類書や雜誌などを置きて、夫れを讀ませるにこした事はな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いと考へて見たり、又統計表によれば、我國は農民が一番多いから、尤も多數の人に傳道するには農民傳道に限ると考へて、日向に往つて百姓をして見たり（之れは農民の狀態がわかり、且つ勞働しながら傳道するの困難なるを實驗して半歲でやめました。）工場傳道を企てんため諸所の工場を視察したりしましたが、明治二十八年東京に出で、熱心な信者で、頭梁なる伊東爲吉氏の弟子となり大工を職として、傍ら仲間の者に、傳道せんといたしました。斯るところに其年の秋、英國から救世軍大佐ライト氏夫婦が來朝して、傳道を開始しました。私は二三ヶ月の間、京橋新富町の狹くるしい救世軍の本營に通つて親しく其主張するところや、傳道の狀態を見て居りましたが、茲にいよ〱自己の使命を覺り、斷然意を決して其年の十一月三十日に、身を救世軍に投じ以て今日に至つたのであります。私は十歲の年から他所にやられ、それなり泌々と父母の許に暮した事のないものでありますから、父母から何のかのと敎えられたり、誡められたりした經驗は余りありませんが、隱れたる母の祈禱は、常に私の身邊を圍みて晝は雲の柱となり夜は火の柱となり、私の靈魂を導いたことを疑ひません。此母の祈禱は私にとりては千萬言の敎訓にもまして尊く感せざるを得ません。私の今日あるは全く母の賜物であります。

尊き母の苦心

法學士　鳩山一郎

▲毎朝三時半に起さる

私にとりては總てが身に泌みた躾でした。特に私は弟と違つて亂暴な方でしたから、隨分ギユー〱やられましたよ。躾と云つても重に學問の事に關して居りますから、此方面から御話して見ませう。

父は大雜把な性質で極端な放任主義でしたから、隨分惡さをした時でもつひ一度も叱られた事がありません。父は私共の遊相手と云ふ格でした。然し母

の方は非常に嚴しくやりました。私が小學校に入學してからは、毎朝必ず三時半に私共を起しました。遲くとも四時には如何しても起きねばならなかつたそして昨夜の中に母が出して置いてくれる數學の問題を四題づゝやらされる、それをやらぬ中は何としても机から離れる事を許されません。弟の方は眞面目なものですから大人しく勉强しますから、答が早く出來る、此方は少し横着な方で、再び床の中にもぐり込み、母が出て來る迄に弟のを見て知らぬ振をして叱られた事もありました。それが濟むと朝御飯迄は英語の稽古、之も母が敎えてくれました。學校から歸ると午後の勉强は漢學で、之には日本外史と極まつてゐました、三四度復習するうちには此方では暗記して仕舞ふ。そんな雜作ないものをやらされるのはいやで〱たまらない。私はもう覺えて仕舞つたからやらなくとも宜いと主張しますが、母は如何しても許してくれぬ。たま〱母の處にお友達が見えまして、私共も一所に遊ひを始めようとする時でも、母の目の前で日本外史を讀まない中は許してくれぬ。私は剛情を張つて庭に飛び出す。其當時は少さくてとう〱母に追ひつめられ、引張り出されては讀された事もありました。

▲學校の課程よりは一年先

斯う云ふ風に母は私共の學問と云ふ事には嚴重な監督と鞭撻を與へました。斯る敎育法が私が中學五年を終る時迄續いて一日も缺けた事はありません日曜だからつて休んだ事はありません。そして私共の時代〱に從つて算術、代數、幾何などの問題を、學校の課程よりは半年或は一ケ年先きの處を私共に敎へてくれましたので、學校に行つては皆知つてる事許りなので、先生迄が馬鹿げてゐる樣に見えて困まつた事がありました。

私はいつも母の努力を思はずに居られません、父の歸宅の遲い時もありましたらふし、急しい仕事のために十二時一時と云ふに寢た事もありましたらう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

げれども三時半には自分で私共を起してくれ、一度も缺した事がないと云ふのは、私共の爲めに其身を獻げてくれたのであります。實際私のやうなものは母が見てくれなかつたら、一度位は落第をしたかも知れません。

▲長持一杯の雜記帳

先達て大形の長持がありますので、開けて見たら隙間もなくギッシリと雜記帳が一杯に積んである。之が私共兄弟二人の爲めに小學校から中學卒業迄、母が毎朝敎えてくれた數學の問題を書いたものです手に取つて見ますと、一頁に二題づゝ書いてある。現在の私にも一寸解りかねる位の問題が出してありました。長持一杯の雜記帳、私は其前に立つて深い感慨に打れた事でありました。此長持一つが母が私共に對する辛勞と愛着と犧牲とを、具體的に見せてくれる最も尊い忘れ難い記念物であります。

子供をしつける二つの大切な事

塚本はま

私は子供をしつけますのに、特に嘘を言はぬ事と人に迷惑をかけぬ事と此二つを大切な事として注意して居ります。嘘を言はぬといふ事の大切な事は申迄もありませんが、もう一つの人に迷惑をかけぬ事には、少々私は考へがあつてやつて居ります。どうも近頃は世の中に立て奮闘いたしますには、意志を強くしなければならない、他人を押し除ても進まなければと云ふやうな風がありはしないかと存じて居ります。これは生活が困難になり、優勝劣敗とか申ことが、自然に行はれて參りますので、グツ〳〵して居ると、世中の落伍者になつて仕舞ますから、止むを得ない結果かも知れません。然しそれではちと人間の道といふものにはづれて居はしないかと存ぜられますので、私は子供に多少生存競爭に負けましても、兎も角も人に迷惑をかけてはならぬといふ、他人をいたはるといふ心を與へたいとしつけて居ります。例へば玩具を取散らしましても他人の迷惑になるから、早く片付けて置かなければならない。其處に何か邪魔な物があれば、他の人がそれに躓くかどうかしてはならないから、片付けて置くといふ風に敎へ込みますので御座います。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

文苑

信子の父様（三）

紫嵐

「走り書の御手紙を拜見して信子さんの嬉しいとも悲しいともつかない唯張り裂けさうに、一パイになつて居る御胸が思はれて私も泣きたうございました」。

三井寺の鐘音の聞える所に居る親しい友からの手紙を懐に入れて信子は庭の花も葉もない白蓮の下のベンチに腰を掛けてその友の美しい眸を思ふた。此白蓮の花の眞白に散き亂れて居る頃友は一人都を去つた。去る夕信子は自分の讀み馴れた藤村詩集を友の荷物の上に置いたなり「さよなら」とも云はずにフラリと學校を出た二日ばかり歸らなかつた。そして友を乘せて行く車の音を聞かずに其日が去つた事が何よりうれしかつた。それから後信子は幾度闇に流れて來る白蓮の香を身に泌て泣いたらう。二三日たつて其友から、

「藤村詩集は三井寺の鐘の音を聞きながら讀みますのには釣合つて居ります」と云つて來た、そして三井寺の鐘の書のそばに、

「信子さん淋しうございます。」

とあるのを見て信子は此頃ポタリ〳〵と散り初めた白蓮は皆友を淋しがらせる三井寺の鐘の響で散るのではないかなど〵思つて悲しがつた事を思ひ出す。此友には今は御鬚の眞白の父様だけしかない。信子は其友と箱根を越へた時山の麓の掛茶屋で迎に來ら

れた父様に初めてお目にかゝつた。それ以來富士が美しく見える水車の音が緩やかに聞える里に、世から離れて娘の愛に生きる老いたる人と、父の情にいそしむ若き人との靜かなホームのある事は常に信子を喜ばせる美しい思ひ出になつた。二人の娘が其老いたる父にもつ、強いデボーションは言葉に表はれぬ、二つの若い心の奥の血の温さまでも感じさせるように思はれた。

此友と共に清見潟を漂うてのかへるさに初めて今信子が嫁くべき人に遇ふたといふ事も、信子には決して偶然とは思はれなかつたのである。

◦　◦　◦　◦　◦　◦

「私ね昨夜父さんの夢を見たのよ、眞實かと思つたら夢でしたわ」

のぶ子は朝洗面場からすぐにお母様の樣に親しくして居る。寄宿舍の先生の部屋に入るとこう云つた。

「さう、夢でも嬉しかつたでせう、どんな夢？」

のぶ子は眞白いカーテンの間から覺めたばかりの新しい空の色を見ながら、まだ名殘をしい夢のあとを追ふ樣に目を細くして、

「あのね私、國の家に寢て居たら父さんがね蠟燭を持つて「寒くはないか」つてね蒲團の裾の方を叩いて「おやすみ」つて行つてしまひさうになつたから「アラ父樣！」つて起き上つたら、夢がさめちまひましたの……ジーッとして寢てゐればよかつたと思つて……それつきりもう眠られませんでしたのよ」

「それでめづらしくこんなに早起だつたのね」

「エ、……」

二人は顏見合せて笑つた。

◦　◦　◦　◦　◦

日曜の夕方のぶ子は新宿の日曜學校から疲れて歸つて來た。日曜の午後の寄宿舍は氣持のいゝ程靜である、のぶ子は日向に文箱を持ち出して來て、古い手紙だの日記だのを讀み初めた。どの日記もすつかり書いてあるのはなくて、みんな、チラホラ勝手な所に書きちらしてあつて、あるものはのぶ子自身に

さへあんまり亂暴な字で讀めない程である。のぶ子は氣むらな女で毎夜〳〵熱心に日記帖を圖書室に持つて行つて勉強がすむと必ず書きつけるかと思ふと一月も二月も打すてゝ見むきもしなかつたり友達の手紙や日記も大切に整理して文箱に入れておくかと思ふと何もかも一包にして臺所にもつて行つてみんな煙にしてしまつたりする。何日の何日ともわからぬ日記の斷片を引出して見ると、

「いつもの如く講堂にオルガンのブラックテスにゆく人なき講堂は嚴かなる迄に靜なり、我はバハの曲を開きたれど悲しさに堪えずオルガンの上に打伏せて「父樣を罪にわたす事を許し給ふならば我より正しきを慕ふ心を取り去り給へと」祈りて泣く、

ア、我心唯主のみ知り給ふなり」。

月、日、

「ウエランダに出てて父樣の御文を月の光に繰り返し〳〵讀んで、いつもながら勿體ない程の御情を私は唯々悲しいと思つた。父樣が此足らぬのぶ子をこんなに思ふて、愛して案じて下さる、その御慈愛の幾千倍にもまさる御愛心で父樣を案じてゐて下さる神樣の御心を思へばのぶ子はこのまゝでたゞ忝

ない有難いと受けてゐられぬ氣がする、どうすれば此弱いのぶ子は神のお愛と父樣の御情とに報ゐ奉る事が出來るのであらう」。

月、日、

「我は我慢が出來ぬ程父樣が戀しくなつた、今日電車で四十位の年配の、豊に肥つた、紳士が五才ばかりのクリ／＼した目の女の子を膝の上にのせて、しきりと話をしてゐる。

「父樣の御鬚堅いのねー」とプク／＼した小さい手で紳士の濃い美しい鬚をつまみながらいふ。

「さうかい、あやちやんの髮より堅い樣だね」。

やがて其子は膝の上に立上つて、父樣の頭にソット觸りながら

「父樣のお頭は髮がぽつちりね。みんな御鬚の方に來てしまつたの。」

と眞面目に聞いて居る。隣に居て私は思はず笑つた「左樣かも知れないね、あやちやんも今に父樣の樣に髮が少なくなつて御鬚が生へるよ」。

「さうして父樣になるの…」

「左樣だね、お鬚が生へちや父樣にならなければならないかな」。

私はもう笑つて居られなくなつた、私は自分と父樣との昔を今又目のあたり見せられた樣な氣がしたのである。そして父樣の御膝の上で全き安心と滿足とを感じてゐる貴いまでに僞のない其子供の顏を涙なくして見て居られなくなつたのである。あの子の其絶對の信と愛とを捧げたその心は、いつまで破られる事なしに、傷けられる事なしに續く事が出來るだらうと。

思ふと私は我身に比して云はれぬ、せつなさはかなさを覺ゆるのである。」

月、日、（續にて）

夕方青天井の野風呂に入つて淸風を袂にはらませながら歸つて來ると門で郵便屋に遇つた。

「私にッ…」と聞くと「今日は一つ」と笑つて渡して行つた。父上からの手紙を握つて机の前に來つて封

を開くともう自分は何となく胸がおどる一字〳〵が刻み込まれるように思ふ。

「此頃の如く雨繁き頃は自然運動不足にて胃腸を悪し易きものなれば精々注意して飲食物を節せられ度又もし其地にて不便の事もあれば遠慮なく申越され度候。留守宅別條なし父は相變らず相稼ぎ申居候今日も只今より中村へ出張致すところにて候御身よりの精しき御手紙たのしみにまち居候。」

自分は靜に手紙を机の上にのせて椽に出た、新月が丁度雲から今色づいたばかりの淡い色を見せてゐる今頃父樣は御一人で旅屋でこの月を見て居られるのであらう、この暑さに法服を召してさそや御暑いことであらうに。私はこうして友達の家に樂しく暑さも知らずに遊んで居る……「父は相變らずかせぎ居り……」なんといふ勿體無御言葉であらう、ア丶今飛んでも歸りたい。何の御手助は出來ずとも同じく暑く、同じく忙しい氣持で居ればまだその方がうれしい。けれど「一日でも長く

海の風にあたつた方がい丶よ」とあれ程くれ〲も云ひつけられて來たものを、此間の御手紙にも「父の事は決して御心配なさるまじく唯御身の健康をのみ父は切望いたし居候」とあつた。今歸るのは決して父樣の御心ではないのであらう。

ア丶私はどうすればい丶のであらう！

私は柱に倚つて潸々と泣いた。

月、日、

ドウーといふ風と波の音でハツと恐しい夢からさめた、すさまじい嵐！、木のなる音、家の揺れる音その間々に岩に砕ける波の音……ア丶それにも増して恐しかつた夢！自分は起き上つて蠟燭をともして昨夜使つたま丶枕邊にある文箱を引寄せて筆をとつた。薄い墨のにぢむのもかまわずに、烈しい情の動に震えてゐる唇を咬んで長い〳〵手紙を父樣に書いた。戸の隙から來る風に蚊張が自分の頬の邊まで寄ては又音も立てずに歸つてゆく、其度に青く重くゆらぐ蠟燭の燈の色が理なく物凄く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

思はれてならなかつた。

アヽ苦しみなくして人に愛せられ人を愛する事の出來ぬ我心である。

○　○　○　○　○　○

「父樣……父樣！のぶ子は父樣の御膝の上で初めて愛の暖さを知りましたそして初めて知つた愛の心をそのまゝ父樣に捧げました。エス、キリストの次に淸く貴い方は父樣と、のぶ子は誰にも敎へられずに一人で信じてしまつたのでムいます。その捧げた信子の心は今私自身でさへも、もう考へる事の出來ぬほど淸い美しいものでムました。のぶ子は其曙の色の樣に新しく美しかつた自分の愛を永久に忘れる事が出來ませんと共に、其が破れた時ののぶ子の最初の冷い涙を思ひ起さずには居られません。

アヽいつの夜でしたらう信子の安らかな夢は大きな荒々しい聲で破られました、驚いてみはつた目に御酒に醉つて母樣を叱つて居らつしやる想像した事もない恐ろしい父樣の御顏を見た時全身を震はしておどろきました。まだ我も世も知らぬのぶ子は筒の袖をぬらして失望の悲に悶えたのでした。さん〴〵泣いた後涙に赤くなつた目を上げて「父樣でさへ……父樣でさへ……私はもう誰も信じまい」と新しい決心をした時のぶ子の小さい亂れて居る心は憎々しく强く堅くなつて居ました。それから後暫時の間ののぶ子の心はみぢめなものでございました、のぶ子は決心した其日から父樣を愛する心を忘れようと一生懸命につとめました。「父樣を愛して下さい」との御願なしに御祈をする事の出來ぬのぶ子はそれからは御祈もしませんでした。

人を愛して人に愛される事を知つてのぶ子は淋しさ悲しさに堪えられない樣な氣が致ました、人を許す事を知りませんでした、しかしのぶ子は永く此まゝでは居られませんでした、再び烈しい愛の力をもつて垂れた涙をはらつて天を仰ぎ、仰い

だ天には、あらはに聖き血にて染められた十字架が輝いて、貴い救の御教をたれて下さいました。その時初めてのぶ子は眞の主の婢となつたのでございます、父様を完全なもの淸い者と思つて居ましたのぶ子は自分も淸い者と思つて居りました、父様の罪を知つたのぶ子は初めて自分の罪も知り心の首を垂れて「救ひ給へ」と祈る事が出來たのでございます。それ以來は信子は曾て覺えないエスの十字架によつて得た强い愛を以つて父様を愛し慕うようになりました。この與へられた愛によつてのぶ子は母様と一緒に堪えられぬすべてを忍びました。

父様のぶ子は父様の御身をめぐつてゐる、血と同じ血が此小さいのぶ子の身にうごいてゐるのがうれしうございます。そして一生父様と此罪の苦しみを分けたいと存じます。

此罪の苦を覺えながら主の十字架をはつきりと仰いて此世を終りたいと存じます、のぶ子は他の

人からでなく父様から人が知らねばならぬ愛と罪とを敎へられたことを深く感謝して居ります又酒に對する烈しい憎と御恩愛に對する深い感謝とは常にのぶ子を强く正しく導いてまゐります。思へばすべて〱のぶ子には惠でないものはございませしでした。のぶ子は此苦みの半ば取去られる事ばかりは願ひません、このせつなさが堪られなくなつた時にキリストがのぶ子をすべてからとつて下さると信じて絶えず祈つて居ります。父様のぶ子を可愛さうと思召して下さい「父様をその罪の中に生きる事を許し玉ふならば、のぶ子をその同じ罪の中に死ぬるを許して下さい」と、こんな御心に背いた祈までもさゝげました。

父様のぶ子は…………

淚のあとだらけの亂れた手紙はこゝまでゝ、後は引ちぎられてゐる。

のぶ子は息もつかすに此手紙を讀み終て、此手紙を書いた夜を思ひ出した。父様ばかりを思ふ事が出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

來るために一生人を愛すまいと決心した夜、國の友から悲しい家のおとづれが來た夜、のぶ子は張り裂けさうな胸を抱いて此手紙をかいた。その夜から發熱して床の人となつた、それつきりのぶ子は此手紙を出しもしなかつたし、よみ返してもみなかつた。

◎　◎　◎　◎　◎

其夜グリーンと白菊とで清に飾られた教會の祭壇の前に立つて嚴かな誓を立てた、重々しい牧師の祈につゞいて、皆がアーンと合した時、太い張のある父樣のアメーンといふ聲は物凄い程すみ渡つてゐたのぶ子の心に烈しい波を立てた、のぶ子には聖い誓の場所を動かぬ先に新しき生涯の最初の祈を父樣のためにさゝげた。

のぶ子の此切な願は何時きかれることであらう。

（終）

日記の一節

野口せい子

日中はぽか／＼とまだ何處やらに一月前の暑さが殘つてる樣な、それでも空の色、雲の片々に秋の氣がみち／＼て隣邸の木犀のかほりが絕へず流れて來る。此頃になると背に大きな籠を背負つた、而して多くは皺がれの爺さん婆さんが初茸を賣りに來る、初茸その者よりは三里も遠い赤城の麓から、此處の町まで通ふといふ此老人たちの姿に何ともいへぬ秋の繪、秋の詩がひそんでる樣な感じが、何時でも呼び込んで見ずには居られぬまでに私をさする。かうした風だから素直に初茸を買つた斗りではどうして歸す筈もない。今日呼び込んだお婆さん年は七十四歲曲つた腰に例の大きな／＼籠を結びつけて背と籠とは四十五度位の角をなして居る。矢張り赤城の方から參りました、此業を初めてからもう四十年も續けて未に思ひ切れぬ、家の者は賴む樣に止めよ／＼と

いふけれども孫よりも此の方が可愛くて……………獨りぶつ〱云ひながら如何にも趣味ありげに籠をのぞく。薄紫の露を帶びた茸が松の葉にからまつて並んでゐる。四十年間と一口にいへば短い樣でも人間一生の事業も四十年續けたら大したものであろう。其處には迚も他人の知り得ぬ趣味と滿足があつて何にも代へられぬ價値を生ずる。此老婆は若い者のいふ言も聞かず毎日往復七里の山路を平氣でむしろ樂しんで往來して居る。何はともあれ脚部の痛みで此頃不自由な主人に此人の脚を切つて貰つたらと叶はぬ相談まで心の中にはくりかへして見た。何の敎のと此老婆骨休めの態に腰を据えて話をつゞくる。無邪氣で平和で全で三つ四つの子供を相手に小春の半日を送る心地がした、その内に飮み度はあるしと老婆そろ〱本音を出して籠の中からガラスの瓶を見せた、水かと思ひの外酒でもなくて夫は透き通つた燒酎であつた、一口飮んで生命のすべてを溶かした樣な顏附して喜んで居る。家の者の心配もたゞ七十四歳の老媼故のみでない事を知つた、それでよく間違なく毎日の勘定をやつて行くものだ、婆にはまシます得意なもので私は四歳の時大病に罹つたが酒一合飮み干した斗りに今までかうして元氣でいます、之は私の生命の親で……………と話はます〱面白さうに油が乘つて來た。けれども眼の光が妙に曇つていふ事が時々もつるゝ、何だか恐ろしくなつて早く歸らぬと家の人が心配する、暮れぬ中にさつ〱といつてやつと立たせた、足もとのよち〱するのは思ひなしか知らぬ。老婆は小さい聲で面白さうに唄ひながら出て行つた、その後影に見入つた私はかうして八十年の命を山影の淋しい松の根に埋めた時、此人の靈は天に於てどれ位の位地に招せられるだらうかと思つたら、あはれに寂しい心地がした、而して若しかしたら此人が死んだ後その靈魂が秋毎に初茸となつて出て來るのではなかろうかとも思つて見た

◎　◎　◎　◎　◎　◎

朝から降りもせず、照りもせぬ空摸樣と同樣に氣

のつまつた日であつた、寢坊をしてうか〳〵してゐる間に來客、髮梳く時も失つて遂其儘撫でゝ置く、それ等からして何しても氣分の晴れそうな筈がない。お客にお晝を出せといふ命令が出た、十一時前臺所に行つて女中相手に御馳走をする、昨日の殘りで今日も材料があるから又栗の御飯を炊く、鮭のつけ燒にかき卵の椀、外に一寸、何かを附合せてほんの有合のもてなし、出す手も耻かしと女中をして運ばせた、處が此お客樣少し風變りの方であつたと見へて膳部を見るや否御講義、人は水と鹽にて生き得るもの多くは唯おごりに過ぎぬ、始めて伺つて御馳走になつた御禮に此秘傳を殘すべしと聞いて見れば成程と思はるゝ樣なり、それでは折角の御飯も何も却つて御迷惑ともなりしかと思へど詮なし。椀の物と御飯を召上りて他へは箸もつけ給はず、此御講義聞かざりしせば調味わろきが故ならんかなど餘計な心配せぬとも限らざりしが、さるにても他人の家に來て何はなくとも、せめてと思ふ眞情に對し取り敢へずさる御講釋。あのお方も少し常識なき學者にやあらんと、さまで惡くくもあらぬ、下根の者打揃へばまづ食ふ事などに花咲く事も多きぞうたてき。

松上鶴（勅題撰歌）

植典侍正四位　藤原祥子

朝日さす小松が原にあしたづの
　ちよの聲こそしげく聞こゆれ。

千葉縣士族　伊藤榮治郎

あしたづも麓をわすれぬ心より
　巣立し松はたへずとふらん。

東京府士族　坂本芳子

よる波のほのみえそめて明方の
　磯の松原たづぞなくなる。

東京府平民　植松徳子

ひなづるの千歲をよばふ一聲に
　老木の松もわかゞへるらむ。

愛知縣平民　三輪經年

たづは皆舊の木末にかへりけり
　濱の松かげしほやみつらむ。

雜俎

隠れたる閨秀畫家

ＳＴ子

不圖耳に這入つた山下林子女史のお名と奥床しい御生活の樣とが妙に胸の底に刻まれて、他人を介するもをかしく、しつけ無ながら駿河台の御閑居を唐突にお驚かせ申て、ニコライ神學校の邸内奥深い二階に、初對面に心おく事も打ち忘れて、女史と種々のお物語を致しました。本文に綴りました通り、女史は廿九年間此の神學校の内に起臥をせられて、明暮カンバスと刷毛に親まれて、浮世の雲の行方さへお心にとめさせられない御樣子、數ある畫家の中に、勝れて聖い像を畫く使命を享けられたのも故あるらしく思はれました。御經歴を伺つて現今の世の安逸な生活斗りを望む若い婦人達には好い興奮劑となると思ひまして、伺つたお話を其儘を記して匿れたる閨秀畫家を御紹介致します。

一

世の中には名ある御婦人方が華々しく御活動遊ばしてお出になつたり、又は御立派でおありになるのに名も知られずに隠れて世の爲にお働きになる方が澤山御座いませうに、私などは何方とも附かず、從て世を益するなどゝ申す事も出來ず、此通りの生活に眞の椽の下の力持、宛然隠遁者で御座いますから世の中に向つてお話する事なども持ちませぬ。夫れに畫と致しては私のは舊派である上に、古いので御座いますから、日に日に進歩致す新派の方に比べましてはお話にもならない、物にもなつて居らないので御座います。

何しろ私が志を抱いて畫家の門に出入致しましたのが明治六年丁度十七歳の時で、其後二年程經つてから工部省の中に美術學校やうの物が設けられました時分で御座いますもの、そうして西洋畫の這入た

抑もの初め、古いと申ても致方が御座いません。亡くなられた雅邦先生など其時分は日々圖引か何かでお出になつたので御座いましたつけ。

私が初志を貫きますまでの障害と苦心も其時分であつた丈けに多かつたので御座います。第一に御維新の際で、何と申ても亂世の後で荒みに荒んで居つた時代で御座いますから、畫なんぞは振回つても見られません。結局は卑められて居つたので私の家などでも皆が畫書きになんぞなつて何うするなんて、一言の下に叱り付けられました位で御座います。第二には滊車の便もない其時分の事で御座いますから茨城縣の笠間から徒歩三十里を年頃の娘一人旅さす事が出來ません、小さければ猶の事子供呼ばはり、迂濶すると出られないといふ仕義。第三には父亡き身の母ひとりを遺して參ると申す不孝者呼ばはりが一日〳〵と引留めさせるので、次で起る問題は嫁けさ强ひるので御座います。不器量に生れ附た身は猶はの事百姓にでも嫁けと申されますのが何より辛くてもう何が何でも東京に出たいといふ心持が矢の樣なので御座います。私の强つてと申す願にやつと許されは致しましたものゝ、學資は決して仕送らないといふ條件、夫でも行けばどうにかなるといふ無鐵砲な若氣で夫も承知を致して上京の途に就きました。親の方では苦しくなれば歸つて來るだらうとの下心であつたので御座います。

二

學資で御座いますか、夫れは無一物の身には眞先きに起る苦しみで致方が御座いまんから、先生のお宅の學僕になりました。其中に明治八年で御座いましたが工部省内に美術學校が設けられたと聞きまして、私の心は矢も楯もたまらず何うかなして入學致し度と存じてもソレ先立つ者が御座いますまい。二圓の月謝は到底出來ませんから、切めては試驗の模樣でも拜見するか一週に二度位は參觀して研究の助けにする樣にでもしましたらと存じて遠緣の者に保證を賴みましたが見込のある者でなくては到底駄目

だと斷られました。彼是奔走します私の熱心を、藩の殿樣がお聞きになりまして、兎も角書いた物を見せろとの御諚、天にも上る心地が致しました。夫で先づ月謝は出して戴く事になりました。處が何處までも運拙い私にはまた一つの故障が起りました。西洋書が興りましてから有望だと傳へ聞いた私は他人に先立つて習ふ心で學校にも這入りましたが全體敎へる先生が之に對して深い研究もしてないものですから、お傭の伊太利人の技量をさへ試めす事も出來ず、唯伊太利人でさへあればいゝと申す樣な考で傭入れましたが失敗で、男生は失望して退學すれば比較的忍耐强い女生も耐え切れないで一人減り二人減り終には閉鎖してしまふと云ふ始末で御座いました丁度機も機勸める人が御座いまして此校から露西亞に遊學致す事になりました。それが明治十三年で歸りましたが十六年、夫からはズッとこゝに根城を据えて仕舞ました。考へても大膽な事をしたと思ひます。昔しは交通が不便で旅行も困難で御座いました

から露西亞語を少し習つてからと思ふ暇もなく、同伴の人のあるを幸に露西亞に參りましたが、語學を毫も存じませんでした爲に大きに損を致しました。

宗敎書も伊太利のなら本物で御座いますが露西亞は舊式の上にも宗敎書は一層舊式で、聖像聖母の骨格から衣服の着色は一定の規則があつて夫以外には出られませんので面白く御座いません。ナーニ樂みな位なら宜しふ御座いますがね毎度〳〵急がれては碌々研究致す間もなく間に合はせる斗り、新たに地方に敎會でも出來ますと必ず十二枚一組を何でも彼でも造り上げて送らねばならぬといふ次第で、さて生計となりますと氣の向かない時にも筆執らねばならず、自由に樂まれるなどゝ申す事は御座いませんから、進みも致しません。自分の書きましたものゝ前を顏を背向けて通ります位耻かしく思ふ事は御座いせん。前に申した通り色の配合も規則に斗りよるのと手間をかけられませんので新派の方が御覽になつてもお氣に召さぬ處斗りで御座います、

三

東京に上りました時には浮世繪を始めましたが、私は生來華美が嫌ひでどうも氣が乘りませんから四條派に移りました。若氣の至りとい申ながら、他人様のお勸めにウカと西洋畫に氣を染める樣になりましたが、今で思ひますと惜しい事をしたと存じます。西洋畫はまだ盛だとは申されませんが其に引かへて日本畫は日と共に進んで深く研究されて居る樣で御座います、其筈で御座いますわ、何と申ても西洋畫は洋館向きで日本のお座敷には先づ一幅はなければなりませんものね、私ももう少し若ければと思はず太息も出ますが、細かい仕事には眼鏡が要ります年齒もう致し方が御座ません。之でも隨分抱負は御座いましたが、先立つ物のなかつた爲に徒らに時を費して仕舞ひ、樣々な障碍から思ふ程伸す事も出來ませんで、廿九年來千變一律繰返しては一組の像を描く身となりました。朝夕心急かれる仕事ながら衣紋を正して聖像に對ふ時に自分の技の拙なきに、獨り背に汗する事も御座います。當節の樣に腕を研かうと思ますれば、備らない機關がないと言ふのとは違ひ、殊には天才でもない私などの致した事は屑にもなりません。

四

私自身にも不思議な程お嫁にゆくと言ふ事が嫌で何も世の中に多く例のある何の場合にも適合する樣な事情が決てあるのでは御座いません。生來孤獨を樂むので、自分の性を枉げて迄服從する謂れないと存じます。親に背いて迄東京に出ましたのも一つは夫が嫌であつたからで御座います。此年齢になりますまで曾て孤獨の淋しさなどは感じた事は御座いません。併し他人樣をまで私と同じ樣におさせ申さうとは存じません、緣附いて夫に事へる樣に生れ附いた方々は何處迄も其使命を竭される筈と存じます。私の樣な人が幾人も出來た日には大變で御座いますよホヽ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

矯風會の今昔

海老名みや

聖書には一粒の芥種も生長すれば空の鳥を宿す程の者となると云つて、何等の正義の働が少いとて失望するなといふ樣に敎えてありますが、矯風會の事を思へば眞に今昔の感に堪ないのでぁります。

此程久々で番町なる矢島矯風會々長をお訪ね致しました。折しも同會常置員臨時集會中で、十名あまりの方々が御集りになつて居ましたが、何れもお親しい方〳〵でありますので私も御末席に列して承ることに致しました。老會長は今日此臨時集會を催された理由を述べられまして、今回大阪の大火が、不思議にも再び彼の遊廓を灰燼に歸したといふことは決して偶然の出來事ではない、能く〳〵深い神意の存する處と思ふの外はありませぬ。此時に當り我らはどうして此機を見過しにすることが出來ましやうせめては我が此老軀を提げてかの地に向ひ市民の覺醒を促すことを得ば實に本懐である、就ては今夕六時半の列車で山室氏とゝもに彼地へ向て出發する筈であるから此爲に皆さんのおいでを願つたわけであると、熱誠溢るゝ老會長の言に列坐のめん〳〵、いづれも無限の感に打たれました。尙一二重要な相談を爲す中に、御出發の時刻が切迫しましたと、女子學院の舍監、矯風會の書記の方々が手拭よ、櫛よ、ハンケチよと取揃へる中に會長は悠々と身仕度をなし、持出された夕飯を幾はいか召上る中に、あれはこうしてこれはあうしてと四方に指揮されつゝ、いざとばかりいでたゝれたる樣は、流石に老將軍のいくさ立ちもかくやと思ひ起さしめて、勇ましく覺へました。

おもへば今より廿五六年も昔のこと、忘れもしませぬ、まだ小崎夫人や私など帶のあはひに赤いしよいあげがほの見へて居た頃に、此矯風會は創立されました。初めて集りを開きましたのはもとの虎の門

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

敎會であつたと記臆致ます。其頃は今日の樣に世間にも、ヤレ愛國婦人會だ、婦人敎育會だ、何々會だと大きな婦人の會合は聞たこともない頃で、婦人會といへば基督敎の各敎會内に十數名の求道者を集めて、聖書のお講義を伺つて編物のお稽古をする事であると心得て居た時代でありましたので、何しろかゝる大規摸の會合は珍らしくて、ずい分譯山の婦人方が集られました。初めは禁酒會としての相談であつたと思ひますが、禁酒丈けでは範圍が狹いからといふので、矯風會とすることになつたと記臆して居ます。禁酒會で思ひ出しますが、其頃禁酒に二の說がありまして、一つは嚴正禁酒で、酒といつたら藥にも用ひない、一切酒氣を含んだものは用ひぬといふ主義であります。かの有名なヤングメン老孃が其說を主張しまして仲々盛んでありました。ある姉妹が、さう仰つても日本のお料理には、大てい酒やおみりんがつかつてありますが、若し余所で御馳走が出た時はどうなさると申ますと、それはお酒が入てると知れば決してたべないと申ました。此說には大分弱つた方もあつた樣でしたが、結局其見解は自由に任せるといふ事になつた樣でありました。今一つ其禁酒で面白い話があります。其嚴正禁酒に反對のある牧師さんのお宅に、一日嚴正禁酒主義の友人が見へられましたら、見事に樽柿を堆ぐ盆にのせて其前に出して置いて、ア、君は禁酒會員だつたねえ、それでは此柿は食べるわけには行かないねえといつて、自分丈さつさと召上つたといふ樣なことも、其頃の一つばなしであります。

　其頃は恰度かの鹿鳴館時代で、世は歐化主義全盛の頃でありましたから、精神的方面は申に及びませんが、外形の方にも矯正すべき事は率先してやらなければならないといふので、中には洋服裁縫の稽古をして、手ごしらへの洋服を着て、どんな集會にもかまはず出た滑稽ばなしなどもあります。思へば夢の樣なおはなしでありますが、當時信者の意氣の盛んなとは今から想像も出來ない位でありました。

星移り物變つて、凡ての方面に活動された同會の勇將中には疾に他界せられた方〳〵も幾人もありますが、今年八十歳の老會長のみは矍鑠として、壯者を凌ぐ勢を以て東奔西馳されますのは感謝すべきことであります。尚同會には此老會長を扶けて廿年一日の如く、會の爲に盡されてをる老錬な熱誠な姉妹方も少なからずあることでありますから、其深い實驗と老熟と熱誠とを以て活動致されますのは、社會改善の上に一大勢力であることは疑ひないことであります、偶矯風會の今昔を思ひて感慨に堪へませんので、一言同會を我新女界愛讀者諸姉に御紹介致したわけであります。

今路加傳

聖山生

聖書は二千年前、ユダヤの國にあつた出來事の記錄で、二千年後の吾等日本人には、直接に何等の關係もない事のやうに思ふものあらば、それは大間違である。聖書は千古萬古に生ける大文章であつて、其中にある出來事は、時々刻々世界人類の間に生じ其の敎訓は日に〳〵新しき意義と權威とを以て人類の上に臨むのである。

或る夜本郷敎會の祈禱會に出た。一人の青年が熱烈な感謝の祈禱を捧げた後で、大要左の如き信仰美談を語られたのである。

私に一人の姉がある、熱心なクリスチャンでありまして、私は常に彼女の信仰に勵まされて居るものである。然るに姉の子息は今年十八歳であるが、お恥しい事ながら、それが實に放逸無賴の青年であつて　十五六歳の頃からよからぬ性質を表はし、兩親はもとより、親戚にまで種々なる迷惑をかけ、不良少年などの仲間入りをいたし、姉をして幾度斷腸の思ひをなさしめたか分りません。聖書に愚かなる兒は母の憂なりとありますが、眞に姉の淚は皆この兒のために絞られ、姉の祈りも亦此兒ををいては外にありませんでした。私は或は祈りを以て或は相談相

手となりて姉を助けてをりましたが、更に改心の模樣なきのみか、其素行は年を追ふて荒むのであります。或時は横須賀の兄(即ち彼の叔父)の許に托しました。兄は海軍の大佐ですが、講道館の五段とかで何しろ海軍部内でも評判の柔道家であります。そこで兄はおれが一つ感化してやると云ふ意氣込みで、朝夕膝下に呼んでは强意見をなし、時には講道館で鍛つた蠑の樣な鐵拳を喰はせたのです。そこに二三ケ月も居りましたが、遂には兄の名を騙つて或所から金をとり出して逃げ出してしまつた。そこで今度は兄の指圖で或る漢學先生の許に托しました。

漢學先生、委細の樣子を聞き、それはそう云ふ人に拳固は駄目じや。そこは矢張り孔孟の敎でなければ行くものでない、と云ふやうなわけで、彼を引き取り、毎日〳〵論語を講じ、彛倫を談じて、日又日を重ねました。然るに先生の前では猫をかぶつてをるが外に出ると少しも以前と變つた事はないのみならず程なくソコも飛び出して仕舞ひました。姉は一日として安き思ひをした事はありません。夫から色々相談の結果、長州秋吉と云ふ所に本間俊平と云ふ熱心なクリスチヤンが居つて、不良少年を預るそうである、其人に願つて托さうではないかとの事で、本間俊平さんの所にお願ひすることになりました。流石の彼れも玆では少しく改悛の色を表はしたのであつたが、如何せん、多年骨髓に滲みこんだ惡習は仲々拔くべからざるものと見えて、遂に又こゝをも逃げ出し、今度は行方不明となりました。そして或は九州邊にさまようて居るとも申し、或は關西あたりであるとも申し、一向其の所在がわかりません。其時姉は心狂はんばかりにて、日夜我子の健在と改悔とを神に祈つたのでありましたが、或晩の事おそくなつてから、コツ〳〵と戸を叩く者があります。祈りに耽つてゐた姉はあわたゞしく戸を開きますと、何ぞはからん、之れぞ今まで祈の中にをつた我兒ならんとは。然も彼は乞丐同樣の服裝をして、寒さに慄えて居りました。姉はこれを見るや、物を

も云はず我子を家に抱きこみ、ヒシと我が胸に抱きしめて之を暖めた。彼は「お母サンほんとに〳〵濟みませんでした、何卒ゆるして下さい。之からキット心を入れかへ、あなたの樣に神樣を信じてよい子になります。許して下さい許して下さい」と、涙ながらに幼兒の如く母の顔を見上げて、其許しを求めるのでありました。之れは去十二月廿五日夜の出事事でありました。私は吾等が誠心誠意を以て祈る時に、神は必ずそれに答へ給ふと云ふ信念をいよ〳〵堅くいたしました、云々。

嗚呼これ路加傳十五章にある、放蕩息子の記事其まゝではないか。誰れか彼の記事を見て、二千年以前の異邦にあつた出來事であるとのみ見ることが出來やうぞ。實に聖書は吾等の右に左に、否我等の心に現存せる事實に對する活ける教訓である。此意味合で此書を讀むならば、聖書中の片言隻語も皆な、無限の教訓と權威とを有するを見出すであらう。

百四十四日分の中へ

今より十八九年前妙齡の一西洋婦人が、我國に來て、熊本本妙寺淸正公社に詣でた、彼は幾百と云ふ癩病患者が、社前に額づいて冥福を祈つてゐる有樣を見て、此無告の同胞を如何にすべきか、深い考へに沈んだ結果、此哀れなる人々の友となりて慰むるのが自分の神に負へる使命であると感じた。そこで彼は一度歸國して此志望を父母に打あけ、遂に意を決して再び日本に來り、熊本市外龍田山の麓に一癩病院を建てたのである。之れが卽ち彼の回春病院で、此健氣なる令孃こそは彼の有名なリデル孃である。

これまで同病院は、自費で入院することの出來ない、氣の毒な人ばかりを收容する仕組みであつたので、身分ある人は、人に知られず入院したいとの涙多き手紙を孃の手許に送り越す場合も少からず、その度にそれらの人々を收容する設備のないことを殘念に思つて居られたが、先頃熊本藩主細川侯爵家より、二千坪の敷地を寄附されたので、孃は早速別院を新築して、少數の自費患者を收容して居られる。之は男でも女でも都合によつて附き添ひをも伴ひ、各別室に他の患者と關係なく入院することが出來、浴室さへも別になつて居るので、治療の成績も著しいといふことである。

此病院に「日々のパン會」と云ふものがある。夫れはこの院費の氣の毒な人々に日々のパンを供給するといふ意味で、どなたでもこのパンの會へ二十圓だけ寄附しますと、この院のすべての患者に一日分だけの食物を送つたことになる。目下この寄附の豫約が二百十二日分出來て居て、殘りの百四十四日分はまだきまつてゐないといふことです。外國の婦人がかうして我邦の同胞のために一身を獻げて盡してゐるのですから、餘裕のある方はこの百四十四日分の中へ、一日分でも寄附したなら、どんなに嬉しいことであらう。感謝紀念の日などに、この院を思ひ出して寄附して下さることは、誠に美しいこと思ひます。

如何にして子女に家政を教ゆべき乎

某夫人談

▲理想としては他人に依托

子女が將來一家の主婦となり、經營者となるものである以上、家政と云ふことの大切なるは申す迄もありません。そこで其教習に就ては、近頃は學校にも家政科などを設け、之れがために幾分の時間を割いて居りまするし、又家庭に於ても色々注意をいたし、或は母親自身で之を教ゆるとか、或は他人に依托するとか、或は家庭教師に依賴するとか、夫れ夫れ然るべき方法を講じて居るやうで、誠に喜ばしき現象であります。

ソコで之に對する私の理想を申しまするならば、私は之れは母親自身よりも、他に知人なり友人なりの中で、人物の確か方を撰び、そこに我兒を托することであります。なぜなれば、親が子に物事を教ゆると云ふことは、誠に困難なことでありまして、子の方では親は何時でも居るものなれば、何時でも習はれる、聽れると思ふので、ツイ仕事に心が入らぬ親はそれが苦になる、骨折つたほどの効果がない。同じ事を三度も四度も繰り返すことになると、ツイうるさくも思はれる、と云つた樣なわけで、双方とも甚だ都合がわるいのであります。ソコが他人同志であれば教える方も注意するが、教えられる方は一生懸命で、其事に精神を集中するのであるから、所

謂一を聞いて十を知ると云ふ事にもなるので、其間大に得る所があるのであります。之れ即ち母子の間柄と大に其趣を異にする所で、古人が「賢者は其兒をかへて敎ゆ」と云つたの、は此邊の消息を云つたものであらうと存じます。

然らば今日これを實行をする事が出來るかと申しますと、私の見るところを以てすれば、自分の大切な娘を托するに足る人物が誠に少ない樣に存じます。或方は家政の事は仲々上手にお出來になるが、人物が感心しないとか、或方は人格は立派なものであるが、餘り其の經驗がないとか、又偶々そう云ふ方があれば其方はそう云ふ事は出來ないとか云ふ風で、今日の所ろ之れは單に理想として憧憬れるより外はないやうであります。

▲矢張り母親の手と心

他人に依托してやることが、少數の場合を除くの外は出來ないとすれば、之を學校の家政科に一任すべきかと云ふに、決してそうでありません。今日の學校に於ける家政科は所謂机上の空論とも云ふべきもので、經驗もなき先生方が、參考書と首つ引きで僅かの時間お茶をにごす樣なものでありますから、之れが家庭の實際に應用しての効能は極めてうすきものであります。

そこで家政の敎育は今日の場合、やはり母親の手と心とを煩はすより上策はないのであります。一の物を調理るにも、一の事をいたしますにも母親が細心な注意をして、心をこめて面倒を見ると否とは、子供の將來に非常な影響を持ち來すのであります。私自身の經驗から申しますれば、此の母親の敎育が先き申した樣な困難のあるのは、子女の頭が出來上らない中に、徒らに注入的に命令的に、あゝしなくちやならぬ、こうもしなければならぬと、只だ無暗に敎え込まうとする所にあると存じます。趣味も嗜好もない事は、大人でさへ仲々うまくやれないものです。夫れをまだ出來上らない頭に遮二無二つぎ込

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

まうどするのは寧ろするものが惡いのであります。で私共では子女が充分に之等の事に興味を持つて來ないうちは、全く放任いたしまして、何事に限らず命令的な注入的な敎育はしない積りであります。自分の心でやらうと云ふ態度にならない時に、やれと云つて嫌がる心を辛抱しながらやらせる位無益な業はありません。これは寧ろ無慈悲な話だと思ひます。其代り自分からやる氣になつた時敎へるゝと自然と其事に就て興味も湧いて來るし、敎ねる方でも張合いがあり敎えられる方でも、あゝもして見たい、こうもしてみたいと云ふ研究心も生じて來る次第で、萬事が極めて有効に行はれるのであります。頭の出來上らないうちに、十日かゝつておぼへる事は、出來上つた頭には半日もかゝらぬのであります。こゝは母親たるものゝ大に注意すべき所と存じます。

宅の長女の方はこう申しては何ですが、仲仲出來のよい方で、明晰な頭を持つて居ります。皆様のおすゝめもあり、本人の希望もありましたので學問で身をたてる積りで、今でも或學校に寄宿舍生活を致して居りますが偶に歸りまして家の事なんか致しましても七八年居ります女中が、お孃樣には何をしても叶はないとこぼしてゐます。「頭のない女中の

半日かゝつてすることは娘は二三時間でさつさとやつてしまいます。私は次の娘共に對しても專ら此方針をとつてをります。

▲臺所の改良より頭の改良

臺所の改良ですか、私共にはそんな問題は一向不案内で御座いますが、成程日本の臺所が、西洋文明國の夫れに比して時間の上にも勞力の上にも亦金錢の上にも不經濟であることは事實でありませう。併しながら、如何に臺所が完備し、瓦斯や電氣や、便利な器械が臺所に應用せられ、現代科學の恩澤が臺所の隅々にまで及びましたればとて、夫れを支配する人の頭が變らない限り、無益の業であると存じます。近頃は婦人の解放問題などが流行いたしまして婦人を家庭に閉じ籠める一の原因は臺所の不備である、臺所が不完全なために非常に無益な時間を費し從て外部に向つて活動する餘裕がないと申しますが現在の臺所でも、心がけ次第では時間の節約などは

どんなにでも出來るので、私共の考では臺所の改良よりもまづ頭の改良が大事だと思ひます。

如何に臺所が改良されても吾等の頭が根本的に改まらない以上は、經濟的に節約して得た時間を如何に利用するか、又た其金錢を如何に活用するか、それが考へものであります。之れまで一日の中五時間を厨房に要したが、改良を加へたゝめに二時間で出來ることゝなつたのはよいが、さてその節約された三時間を、芝居を見るとか下らぬ小說を讀むために費した日には、何のための改良やら一向無意味となりませう。先日も或方が湯殿と井戸まで六尺しか隔らないのに、樋をこしらへて居られましたから、私は人間と云ふものは何處まで勞力を惜しむもので御座いませう。私共は田舍に暮して居つた時などは、井戸まで半丁もあるのに、矢張りお風呂の水を手桶で運び、使ひ水も皆さつさと運びました。そうして雨がふる時はカッパを被つて汲んだものです。今日は釣桶は重いからつてポンプにし、雨が降ると困る

からつて、屋根を構へる。そうして蓄積した勢力を何處にどうお使ひになる積りですと云つて上げました。多少の不便は運動になつて宜しう御座います。こう申せばとて私は臺所の改良に反對いたすのではありません。誠に結構なことで、私共も雜誌などにこんな記事があれば、注意して拜見して居りますが何よりも肝要なことは、臺所の改革に先ちて各自の頭腦を改良せねばならぬと申すのであります。

（談話文責記者にあり）

石鹸の素人鑑定法

石鹸の善惡鑑別は商賣人の間でも、餘程困難になつて居ります。商賣人は手に握つて見て、品質を見分けるが、これは素人には出來ませぬ。

素人に一番良い試驗法は、試驗管に石鹸を削つて粉にしたなのを入れ、其上からアルコールを注いで殘らず溶解して了うのは極良いもので、底の方に白く沈澱物の殘るのは、それ丈けか土とかメリケン粉とかの交ぜ物がある證據である。又石鹸を削つて見てボロボロ粉になるのは、良い物で、蠟のやうにねつとりとして固まるものは、惡い物であります。

一番簡單な試驗法は舐めてみて舌を刺戟せぬのが良い。これは中性になつて居る證據である、舌を強く刺戟してピリ〳〵するのは未だアルカリ性のある證據だから肌を荒します。けれども交ぜ物が非常に多くて、石鹸の實質の分量極少ないのになると、譬へアルカリ性の強い惡い石鹸でも舌を多く刺戟せぬ道理になるから、必ずしも凡ての場合に、此舐める法を應用する事は出來ぬのであります。最も完全な試驗法は此舐めて刺戟の無い物を、更に前に云つたアルコールの試驗法にかけ、夫れで沈澱物が無ければ、まづ上質の石鹸と云ふ事が出來ます。（安永舍主人談）

雜誌『ホーム』の發刊

基督教主義の婦人雜誌と云へば、「明治の女子」と「婦人新報」位であるが、前者は女子青年會の機關紙で、後者は矯風會の機關であるから、純粹の雜誌は實に我々の「新女界」のみであつた。我國基督教文學のため誠に心細い次第でないか。

然るに今回田村直臣氏主幹の下に「ホーム」と云ふ家庭婦人向きの雜誌の發刊を見るに至りしは深く喜ぶ次第である。本號には江原、倉橋、河井、尾島等の我黨の人々のよい話がある。附錄として田村氏獨特の子供の讀み物もある。內容外觀ともによく出來てゐる。健全に成長せられんことを希ふ。

（一冊拾錢一年分一圓二拾錢）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

編輯局の一隅にて

△一月十七日に山室大佐を救世軍本營にお訪れ申しまして「身にしみた親のしつけ」を承はつてなりますと號外〳〵の聲が聞えます。それは大阪の南新地の遊廓燒失の號外でした。曾ては曾根崎新地がやけ、昨年は吉原がやけました。これは偶然ではありません天の火であると申すことでした。一層やけるなら貧民の街がやけるより、罪惡の巷がやけるのがよいのです。山室さんは早速大阪の加藤さんや林歌子さんに電報を發して廢娼運動をはじめたのでした。

△矢島老女史がこの嚴寒中にも拘らず八十歲の老軀を提げて大阪まで右の運動のため出張されたのは萬人のひとしく感動するところでありませう。罪惡の勢は日に月に加はつて來るのみで、少しも退滅の色は見えません。我等は矢島女史の志をついで、一生懸命に社會廓淸の事に當られねばなりません。

△婦人の解放問題もありませう。家政の問題もありませう。高等教育問題もありませう。然し、我國現今の問題中婚風問題より大なる且つ切なる問題はありません。社會の廓淸は家庭の神聖に基かねばなりません。家庭の神聖は個人の覺醒に待たねばなりません。所詮廓淸は覺醒であります。

△家庭の神聖を期せんとならば我等神を信ずる男女の結合に待たねば到底駄目であります此點に於て本號の柿崎博士の論文は深く注意すべきものと存じます。信者が未信者に嫁ぎ、又未信者を娶りて嘆むる悲慘ばかり、慘じめなものはありません。

△私の友人に信者でなければ、決して嫁かぬと主張して、ふる程の緣談を片つぱしから斷り、ツイ先月のくれにとう〳〵理想通りに目出度信者の方に嫁かれた方があります。此意氣がなければなりません。我等の大事なこの信仰を、地位や名望や富の次において、此問題を解決したら、其結果はちやんと見すいてゐます。

△寒さ誠に嚴しう御座います、皆樣お大事になさいまし。いろ〳〵な原稿を歡迎いたします（塑）

定價

（郵稅加算）	內地及朝鮮支那	外國
一部	金拾錢	金拾四錢
六部（半年分）	前金六拾錢	前金八拾錢
十二部（一年分）	前金壹圓拾錢	前金壹圓六拾錢

廣告料

一行（廿三字詰）	金廿五錢	一頁	金拾圓
四半頁	金三圓	內表紙	金拾貳圓
半頁	金五圓	外表紙	金拾八圓

猶ほ引續き御廣告の向へは特別大割引可仕候

摘要

▲本誌代金は總て前金にて御拂込み被下度候

▲郵券代用は一割增の計算にて御送附被下度候

▲御送金は振替にて拂込ろゝ方便利に候但手數料金壹錢御加へ被下度候

▲通信、爲換、寄贈雜誌等は必ず發行所宛に願上候

明治四十五年一月廿五日印刷
明治四十五年二月一日發行

發行兼編輯人　東京市小石川區林町四十三番地　海老名彈正
印刷人　東京市小石川區丸山町四番地　相原一郎介
印刷所　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　齋藤活版所
發行所　東京市小石川區林町四十三番地　新人社

電話番地二五四四
振替貯金口座一四〇〇五

新人第拾參卷第二號目次

（二月一日發行）（金拾五錢）

◎社　　説

◉意志の聖人　海老名彈正

◎教　　壇

◉新人の使命　海老名彈正

◎想　　苑

◉ベルグソン哲學に就ける所感　日野眞澄
◉所謂自然主義と基督教（上）　寺澤精一
◉現代の道德　安部磯雄
◉基督教の本質　山口金作
◉倫敦よりアメリカまで　内ヶ崎作三郎
◉基督の同情　本間俊平
◉予が見たる獨逸の學生　村上幸多

◎教界思潮

◉基督教の最も主張すべき二大問
△實踐躬行と生命力　渡瀬常吉
△宗教的眞理と實力　千葉勇五郎
△神人の理想　岡田哲藏
△イエスの人格の宣傳　小山東助
△人格神と靈界の現實　柏井園
△基督的意識　杉山重義
△倫理的精神教　加藤玄智
△信仰と愛　山口金作

◎評　　論

△自他不尊の思想　安部磯雄
△全體として卓越す　富永徳磨
△神人の關係　白石喜之助
△シンシャリチーの高調　中村正路
△高き理想潔き愛　武本喜代藏
△愛敵主義　根本正
△我思想界と基督教　深田康算
△個人主義の醇化　三澤糾
△靈肉一如と實生活　曾木銀次郎
△愛　信　望　小松武治
△精神的生命の充溢　今泉眞幸
△十字架的精神の實現　大賀壽吉
△社會的倫理的人格教　桑木嚴翼
△活動と宗教的實驗　松村介石
△靈的要求の滿足　高木壬太郎
△基督的生命と社會救濟　留岡幸助
△人格的唯一神教　三並良
△精神的文明の生命　原田助
△神子的靈覺　栗原基

◉新年諸雜誌を通して見たる文藝宗教及思想界
△新年に於ける創作及評論　白夜生
△新年に於ける思想界小觀　快堂生
△新年に於ける宗教雜誌瞥見　聖山生
◉四十四年宗教界概觀　聖山生
▲時評
▲新刊紹介
▲編輯たより

發行所　東京市小石川區林町四十三番地　新人社
貯金口座東京一四〇〇五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

拾二卷 新人 合本

一月中旬製本出來　定價金一圓參拾錢(送料共)

社說(海老名主筆)

▲教育勅語と基督教▲現代基督教の二大根據▲國民道德の進化▲國民道德の究境▲朝鮮傳道▲國民道德の根本を發揮せよ▲神社崇敬の疑問▲朝鮮に於ける感想▲朝鮮人の使命▲祖先崇拜か子孫崇拜か▲我國民性の變遷と基督教▲支那の內亂と帝國民の覺醒

教壇(海老名彈正)

▲超人の使命▲信仰と忠君▲弱者の宗教強者の宗教▲現代に對する基督教の使命▲橄欖山上のキリスト▲基督の自覺▲新道德の基礎▲基督の流離▲基督の僕と友▲希望の生活▲自信▲靈能の實證

想苑

▲精神生活の內活　高木壬太郎
▲現代思潮と敎育家　加藤直士
▲基督教界の缺陷　中村長之助
▲一元か多元か　富永德磨
▲近時の基督教觀　津荷環山
▲教會大合同論　內ヶ崎作三郎
▲基督株殺論を駁す　額賀鹿之助
▲滯德日記　吉野作造

▲基督教神秘主義の興起　富永德磨
▲基督教會成立の顚末　中村長之助
▲基督教の賜物　安部磯雄
▲基督教と沒我思想　芦田慶治
▲基督教は個人主義か沒我主義か　富永德磨
▲時代先覺の識見　海老澤亮
▲東洋思想と基督教の交涉　赤司繁太郎
▲社會事業の新紀元　鈴木文治
▲東洋意識と基督教　中村長之助
▲基督者の見たる起信論　津荷環山
▲イエスの人格　額賀鹿之助
▲自然主義か理想主義か　鹿子木員信譯
▲天才論　富永德磨
▲基督教の眞髓と宗教哲學　久布白直勝
▲敎派合同の史的發達　小平國雄
▲イスカリオテのユダ　森脇白夜
▲予が基督に對する關係の歷史　安部淸藏
▲予は佛陀より基督に往けり　小山鼎浦
▲祖先崇拜と基督教　赤星仙太
▲國家主義と個人主義　帆足省夢
▲實生活に働く信仰の力　內ヶ崎作三郎
▲海野氏の日本人種改造論を讀む　谷津博士
▲聖書講義▲雜俎▲時潮小觀▲文藝小觀▲時評▲其他

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第三卷 新女界 合本

一月中旬製本出來　定價金壹圓（送料共）

◉社説　（安井哲子）

▲死ぬ迄働き續ける元氣▲無意識の感化▲個人の歷史▲奮闘と慰安▲他人の喜びに對する同情▲趣味のいろ〳〵▲過つて改むるに憚る事勿れ▲懷かしい十年前の夏▲溫情▲勇氣▲犧牲の精神▲心の準備

◉講壇　（海老名彈正）

▲現代婦人の缺陷▲永遠の生命▲恩惠の聲▲柔和の福音▲誤解せられたる基督▲女子の解放▲愛苦の眞義▲神の聖愛▲向上の動機▲基督の家庭▲基督教の眞髓

◉想苑

▲新らしき生活　谷津博士
▲現代女學生の惡傾向　小此木松子
▲禮義の根本觀念　三谷民子
▲亞米利加だより　海老名一雄
▲かあやん　德富健次郎
▲現代小說雜誌　小山東助
▲湯臺叢話　谷澤直秀
▲獨逸見聞記　吉野作造
▲婦人解放の是非　宮田脩
▲佐久間大尉の手紙　德富健次郎

▲矯風問題　島田三郎
▲女子の敎育の標準　村田勤
▲婦人の活氣　小此木松子
▲伊香保より　野口精子
▲形式道德の無能力　村田勤
▲土耳古の話　小松武治
▲惠み多かりし二夏　三谷民子
▲夏の巴里　藤島武二
▲西班牙の夏　湯淺一郞
▲常樂の生活　二宮貞子
▲子女敎育に對するの母の務　海老名みや子
▲婦人と信仰　海老名彈正
▲「アンドリヤ、デルサト」を讀みて　三谷民子
▲無題錄　小此木まつ子
▲女子の高等敎育論　ジヨルダン博士
▲我國女子の將來　成瀨仁藏
▲婦人解放問題　內ヶ崎作三郞
▲男女問題の意義　安部清藏
▲淨心錄　谷澤直秀
▲世界最大の美　宮川經輝
▲文欄▲家庭▲雜俎▲衞生▲隨感▲其他稱々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

時代の要求する基督教家庭雜誌

ホーム

每月一回 一月一日發行

第一卷第一號

定價一部十錢 郵税一錢

◎ホーム第一卷第一號目次

口繪 ほどこし「ミレー筆」
長尾半平氏の家庭

發刊の辭
ホームの意義
禮儀作法につきて
新年（唱歌）
婦人と基督教
子供本位
子供の教育
日々の枝折
ブラウニング夫人
長尾半平氏の家庭を訪ふ
名畫「ほどこし」解説
明治四十四年の婦人界を懐ふ
新年の茶事
新年雜感
年始まわり
編輯だより
お雜煮でお腹は一杯
双兒のお雪

田村直臣
江原素六
羊舟
河井道子
文學士 倉橋惣三
塚本はま子
尾島眞治
岩村透
流水
岡野知十
小佐野眞春
みゝ、た

◎美麗なる繪畫寫眞版入

東京銀座四ノ一 教文館

ホーム社

振替一八〇〇四 日曜學校協會宛

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

入院診斷後應需

松田、林、峰間、三副長は目下當院に在勤

(本電) 八八八（病院用）
八九八（私宅用）

東洋內科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋南

院長　醫學士　高田畊安

相州高座郡茅ケ崎町海濱從停車場半里

南湖院

電話ちがさき二番

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

但　院長渡歐中　副長代理す

新女界第四巻第貳號

明治四十五年二月一日發行

明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

東京市小石川區林町四拾三番地 新人社 貯金口座東京一四〇〇五